

BPW UN—CSW インターン派遣事業

# 第 56 回国連女性の地位委員会 インターン報告書



2012年2月27日～3月9日

特定非営利活動法人

日本 BPW 連合会

# 第 56 回国連女性の地位委員会 (UN-CSW) インターン参加報告書

## 目次

第9回UN-CSWインターン報告書発刊に寄せて 日本 BPW 連合会 理事長 松原 敏美	2
はじめに	3
UN-CSW56 Fact Sheet	4
UN-CSW56のハイライト 日本 BPW 連合会 国際委員長 平松 昌子	5
I 第 9 回インターン報告	
1. パラレル・イベント、及びその他のイベント報告	8
2. インターンシップを振り返って	
平野 歩	30
小林 悠	31
吉原 彩	32
照井 奈々帆	34
II BPW参加者報告	
1. UN-CSW56の優先テーマ「農山漁村の女性のエンパワーメント」 日本 BPW 連合会 広報委員長 柳下 真知子	36
2. 大きく変化している国際社会のジェンダー問題 日本 BPW 連合会 元会長 黒崎 伸子	39
III 情報集 Q&A	44
おわりに	46

## UN-CSW 第9回インターン報告書発刊に寄せて

特定非営利活動法人日本BPW連合会  
理事長 松原 敏美

第9回インターンの皆様の御報告をまとめて冊子に出来ますこと、会員ともども大きな喜びでございます。

ニューヨークにおいて第56回国連女性の地位委員会が開催されるのに伴い、各国のNGO、NPOが女性問題について多彩な関連イベントを展開しました。当会が加盟しているBPW インターナショナル（BPWI）は、国連の経済社会理事会に対する諮問的地位を持つ団体ですから、各国のクラブから参加する会員も多く、そのネットワークの強さを如何なく発揮する場にもなっています。

私たちは、日本の若い女性たちに、国際的な議論と意思決定の舞台を、実際に自分の目で確かめ空気を感じる機会を提供したいと考え、この事業を始めました。インターンの皆様は、女性がリーダーとして信念に基き活躍する姿に接し、触発されるものがあったのではないのでしょうか。また、女性問題に関する最先端の議論に触れ、その根拠となる考え方を理解することで、これから歩もうとする人生において、背筋をしっかりと伸ばし堂々と生きるための支えを獲得されたのではないかと、期待しています。

皆様も感じられたように、先ず女性自身が地位の向上を望むことが大切です。挑戦し切り拓く勇気を持つことが大切なのです。

皆様の報告が、貴女方と同じ世代の女性たちを励ますと同時に、貴女方のいる場所にかつていた先輩の女性たちに対して、改めて奮気を促すきっかけを作ってくれるでしょう。日本BPW連合会は、女性たちのネットワークを、世代を越えて広げたいと思っています。今後日本BPW連合会の活動に、御参加いただければ幸いです。

皆様のご活躍を、心からお祈り申し上げます。

2012年4月

## はじめに

この度は、インターン生として私たち4名(小林悠、吉原彩、平野歩、照井奈々帆)を選出していただき、そして準備期間から現地まで手厚くご指導いただき、本当にありがとうございました。私たち一同大変感謝しております。

今回の第56回CSWへの派遣インターンを通して私たちが感じ、考えたことはそれぞれ異なっているかと思いますが、国連本部という世界最先端の場で、農村・漁村女性における最新の情報を好きなだけ聞くことができるという滅多にない貴重な経験を得たことで、私たちが大きく成長でき、私たちの視点を世界へ向けることができたということは皆心から感じていることです。

私たちのように日本からザンビアなどのアフリカ諸国、そしてアメリカはもちろんのことヨーロッパまで、文字通り世界中の方々が1つの部屋に集まり、女性の問題について一緒に考え討論している。CSWを通して、私たちは世界と触れ合うことができました。時には発言者の意見に首をかしげたり、話についていけなくなることもあったとしても、間違いなく私たちは「日本人」ではなく「世界の一人」としてその場に関わっていました。

第56回CSWが終わった今、私たちがしなければならないこと、それはこの経験を私たちの中だけで温めておかず、より多くの人へ発信していくことです。国連という凝縮され世界で見聞きしてきたことを、できる限り幅広くみんなに知ってもらうこと。私たちはそれこそがBPWインターン生としての一番のタスクだと考え、報告書製作に力を入れてまいりました。この報告書が、わずかでもBPW会員の皆様と来年度以降の新たなインターン生たちの糧となっていただければ幸いです。

## 第 56 回国連女性の地位委員会 UN-CSW56 Fact Sheet

### CSW (Commission on the Status of the Women 女性の地位委員会) とは

国連の 6 主要機関の一つ経済社会理事会に附属する 8 つの機能委員会の一つで、女性に関する課題を議論する。構成は 45 カ国で、世界の全てが議席をもつものではなく、5 つの地域別に議席数が割り当てられており（日本はアジア太平洋地域）、地域別に選挙をして議席保有国を決める。定例会合は、毎年 2 月末から 3 月にかけての 2 週間 NY の国連本部で開催される。

### 討議される議題の種類

優先議題 (Priority theme) と見直し議題 (Review theme) それに緊急議題 (Emergency theme) が提案され、議論の上最終日に合意結論 (Agreed conclusion) という形で採択される。合意結論は各国政府を拘束するものではないが、基本的に各国とも採択された合意には責任をもつというスタンスで議論に参加している。これは NGO の会合ではなく、政府間の会合である。

### NGO の役割

採択される合意結論が、NGO のスタンスに合致するコンテンツが盛り込まれるよう、事前にそれぞれの政府に対し、或いは CSW での審議期間中に様々な形で政府代表に申し入れをするなどの活動をする。また各国から集まった NGO は、UN-CSW と併行して、様々なワークショップやパラレル・イベントを開催し、世界の女性の現状について報告・啓発を行う。

### 議題の決定方法

基本的には、北京会議の行動綱領に盛り込まれた 12 項目の実行状況を、順次、審議する。前回の CSW で、正式に決める。見直し議題とは、5 年前に議論された議題を再度取り上げその実施状況を検討し、その実現の加速化をねらう。緊急議題は毎年生じる女性に関する問題を議論し決議にまとめる。

### CSW56 概要

- 実施期間：2012 年 2 月 27 日～3 月 9 日
- 場所：ニューヨーク国連本部
- 優先テーマ：Gender empowerment of rural women and their role in poverty and hunger eradication; development and current challenges (農山漁村女性のエンパワーメント及び貧困・飢餓撲滅・開発・今日的課題に於ける役割)
- 参加民間団体数および参加者数：435 団体 2,084 人(国連発表)
- イベント数：サイドイベント約 70、NGO によるパラレルイベント約 300
- 日本の参加者数：約 48 名（日本政府国連代表部第 1 回 NGO へのブリーフィング 3 月 2 日参加者数）
- BPW からの参加者：インターン 4 名（平野歩、照井奈々帆、吉原彩、小林悠）及び平松昌子、柳下真知子、黒崎伸子の計 7 名
- 日本サイドイベント：主催 NGO は国連 NGO 国内婦人委員会、国際婦人年連絡会、JAWW の 3 団体（日本政府国連代表部後援）

(平松 昌子)

## CSW56 のハイライト

国際委員長 平松昌子

第 56 回国連女性の地位委員会は、2012 年 2 月 27 日から 3 月 9 日にかけてニューヨークの国連本部において開催された。またこれにあわせて各国の NGO による 300 のパラレル・イベントと、約 70 の政府や国連機関及びそれらと NGO の共催によるサイド・イベントがそれぞれ時間刻みで展開され、エネルギッシュな女性たちが国連界隈を彩った。政府代表を除く民間団体の参加者は 2084 人、435 団体と発表されている。日本 B P W 連合会からはインターン 4 名を含む 7 名が参加した。

ところで、今年のニューヨークは暖かかった。そのことが参加者たちの足取りを軽くさせたが、国連本部の改修工事が遅々として進まず、国連本部に入るための通行証は、すべて 1 団体 20 枚、さらに会議場に入るには 1 団体 1 枚のセカンド・パスを必要とした。BPW-I も条件は同じである。昨年極めて厳しい獲得競争をした経験から、今回は日本での上部団体【国際婦人年連絡会】を通して、その通行証発行を申請した。

第 56 回 CSW のテーマは 「農村の女性について」

毎回、CSW では優先テーマと見直しテーマが設定されるが、今回の優先テーマは【農村における女性の問題＝農山漁村女性のエンパワーメント及び貧困・飢餓撲滅・開発・今日的課題に於ける役割（内閣府訳）”Gender empowerment of rural women and their role in poverty and hunger eradication; development and current challenge”】。

世界でいま、深刻な問題となっている農村における貧困と飢餓を解消するために、農村の女性力を強化する必要がある、そのために何が必要か。

会議場では、このテーマに沿って、各国政府代表が演説するほか、円卓会議といわれる自由発言の会議、或いはパネル討議と呼ばれる専門家の討議などを通して、意見が交わされる。今回は、各国代表の発言希望が例年より多く、102 カ国に上った。このことは、このテーマについて各国の関心が高いことを意味しているのかもしれない。日本の演説は、橋本ヒロ子代表が行った。

こうした会議でのプログラムとは別に、舞台裏では、最終日に採択される【合意結論】に盛り込むべき内容・その表現をめぐって折衝が行われる。

今回のテーマは昨年（2011）の第 55 回 CSW で最終確認され、その年の秋に開かれる専門家会議で討議され、その報告書を事務総長に提出する。これをもとに、国連の事務当局（UN Women の 1 部局）が、【合意結論案】を作成し、事前に各国政府に送付される。この原案は、NGO としての意見を述べるために関心を寄せてきた。しかし、NGO は、特に日本では、（政府の秘密的状況もあって）、その入手に苦労してきたのだが。

国連文書の取り扱い大革命：すべてがネットで ICT 革命に、UN Women の発足もあって、国連関係の文書が、ほぼ同日にネットで流されるようになった。【合意結論案】について言えば、ドラフトに対して、各国政府が提出した「削除」、「追加」などの情報をそのまま記入したデータまで送信されてくる。

例えば （3 月 1 日－（CSW4 日目）に配信されたものから）

ドラフトに記載された文言

a) Integrate a gender perspective into →太字は、提出された意見と修正

a) Integrate [EU の追加 the human rights of women and girls and] a gender [EU の追加 equality] perspective into →

各国が追加したり削除したりしたものを取り入れると、

a) **Integrate the human rights of women and girls and a gender equality perspective**  
といった具合で、・・・ドラフトは長くなる傾向にある。

最終日：農村女性に関する【合意結論案】は採択できなかった。

ただし、日本政府提出決議案\*を含む7本の決議案は採択された。

\*【自然災害におけるジェンダー平等と女性のエンパワーメント】

3月9日CSW最終日、日本が提出した上記の決議案など7つの決議案は採択されたが、合意結論案は、最後の時間まで意見の一致ができず、議長発言で3月15日に再度集まって、処理することになった。どこで何がつまづいたかの正式発表は無いが、女性の健康をめぐって、【生殖に関する権利の項目 (Reproductive rights)】が、ある代表の強い反対にあったためと伝えられている。

3月9日、合意結論を採択せず閉会したことについて、国連の女性問題の最高責任者であるバチレ氏は「農村女性への取り組みについての枠組みを打ち出すべき【合意結論】が採択されずに終わったことは極めて遺憾である」との意見を表明、また議長団を代表してカマラ議長も深い不満の意を表明した。

【合意結論案】採択にいたらず。

合意結論が最終日に採択に至らなかったケースはこれまでに無いわけではない。しかしそれも字句の調整程度で後日関係者会議を開いて採択している。しかし今回は、3月15日に再度会合は開かれたが意見の相違点を埋めることができなかった。

3月15日、【合意結論案】を採択できずにCSWを終了することに、バチレUN Women事務総長は極めて強い遺憾の意を表明し次のように述べた。

『農村における女性の力を強くするための【合意結論案】に対して、一致点を見つけられなかったことは、如何に自分たちが無力であったかを示すものだ。私はこの事態に失望しており、この失望を世界中の女性たち、特に成果を期待していた農村（山村・漁村）の女性や少女たちと共有するものである。』

各国政府の政策指針となる【合意結論案】が採択されないまま終わったこと農村、特に農村の女性問題関係者に衝撃を残したようだ。

本会議とは別にビルでは、

70件のサイド・イベントが開催された。

国連ビル改修工事で、NGOの国連ビル内での行動は制限される中で、政府或いは国連機関とNGOの共催企画として実施されたイベントを、サイド・イベントと称して特別のパスを発行して対応したが、その数は70件に及んだ。

日本も、日本の国連代表部とNGOの共催による『破壊と復興、そしてジェンダー平等：東日本における大地震と津波』というテーマで、3月1日（水）13時15分から75分のフォーラムを展開したが、この中でBPWは『What we did and What we should do ad a women NGO』というタイトルで大震災に対するBPWの活動を報告した。このほか、黒崎伸子さん（長崎クラブ）が、国連NGO国内婦人委員会の推薦で、災害時の医療活動について報告した。会場は70人の定員に対して90人以上がつめかけ、関係者はイベントの成功を喜んでいた。このイベントでは、インターンの4人が若さを発揮して会場整理や資料の配布など、力仕事に協力し、原ひろ子さんら他のNGOメンバーに感謝された。

世界各国の NGO は、国連周辺の会場で 300 をこすパラレル・イベントを展開した。

国連ビルの改修による入場規制は各国 NGO 参加者の足を鈍らせたかもしれないが、それでも 2,000 人を超す女性たちがニューヨークに集まり、さまざまな形で自分たちの活動や立場、考え方などをアピールしていた。タイトルをみると、『土地の権利、食の安全、そして安定した開発』、とか『貧困の削減と農村女性の発展に向けての成功例紹介』などなど。

BPW 関連では、ドイツの代表部で『イコール・ペイ・デー』についてのフォーラムが行われた。これはヘルシンキ・ कांग्रेसでも『イコール・ペイ・デーの開催に関する決議』が採択されており、日本からの参加者ほぼ全員で参加し、日本での実施に向けていくつかの参考資料を持ち帰ることができた。

参加したイベントについては、それぞれの報告が出るであろう。

### BPW International の活動

BPW International は、経済社会理事会の協議資格を持つ団体として、今回も文書による意見書を事前に提出しており、その内容はメールに掲載されている。

また、毎朝、午前 8 時半から、マーレイ・ヒルズ・ホテルのフリーダ会長の部屋でブリーフィングが行われた。これは、前日、本会議傍聴者の報告を初め、参加したイベントについての報告、さらに、当日の情報提供、それに参加者同士の交流など、極めて有効なものであったと思う。インターンも参加してそれぞれ交流を深めたようだ。朝食もとらずに参加したメンバーにとって、用意されたコーヒー・紅茶の飲み物やクッキーなどはうれしかった。

BPW International が関わったイベントとしては、『ファルチャーさんを囲む夕食会』や、『美術館見学会』それに、共催者として実施したパラレル・イベントとして、『イコール・ペイ・デーワークショップ』のほか、『創造的な農村女性のエンパワーメント』、『アジアとモンゴルの農村女性の共通の挑戦』それに『農村の女性と子供たち：トラフィッキングへのリスクの高いグループとして』などが紹介されていた。



日本 NGO 主催のサイド・イベント



## I. UN-CSW 第9回インターン参加報告

### 1. パラレルイベント、及びその他のイベント報告


女性の地位委員会の会期中、それにあわせてニューヨークに集まった世界各国の NGO によるイベントが開催されている。

サイドイベントとは、各国政府或いは国連機関が NGO と共催で行われるものである。サイドイベントの多くは国連本部内を会場としている。一方、パラレルイベントは NGO が主催するものである。国連本部周辺の施設内 (Church Center for the UN、the Salvation Army) で催され、会期中の 2 週間ほぼ毎日数十という規模で行われる。

それぞれ約 90 分の中で、パネリストたちによって活動報告や問題提起、意見交換が行われる。イベント参加者も最後の質疑応答の時間などで質問やコメントすることができる。

#### 【サイドイベント】

日時	2月27日(月)	氏名	平野 歩
テーマ	ACCESS TO EDUCATION = SUCCESS IN EMPLOYMENT?		
主催団体	Australia, New Zealand and Pacific Missions		
内容	<p>オーストラリア、ニュージーランド、及びその周辺諸国で行われている教育格差への取組みについて、キリバス共和国から現地 NGO 代表の MoiaTetoea 氏、ニュージーランドにあるオークランド工科大学の Marilyn Waring 教授 (公共政策)、オーストラリア政府から女性局 (Office for Women) 支部長の Mairi Steele 氏が各々の立場から、自国における活動・事業報告があった。</p> <p>特にミクロネシアやポリネシアなど小さな島々における中等教育機関 (中学校や高等学校) の数が少なすぎることに、女性の高退学率などが問題に挙げられていた。これらの問題に対しては、オセアニアにある NGO が介入し、教育へのアクセスがよりしやすいように取り組んでいる。</p> <p>また高等学校や大学を卒業していない人は、収入が安定しない季節労働 (seasonal labor) の職に就く人が多いことも取り組むべき問題として挙げられた。</p>		
感想	<p>各国の政府 (教育省) の代表者が発表であったが、このサイドイベントに参加していた NGO 関係者や若者と活発な意見のやりとりがあった。実際にこういう場を通して、「市民」の声が直接政府機関に届けられ、反映されていくのかとわくわくした。</p> <p>「教育の価値」について話し合っている場面もあったが、一様に「教育」と言っても、国によってその在り方や価値は様々なんだと感じた。日本では NGO や NPO が「普通教育」の分野で活躍しているイメージはあまりないが、国によっては彼らが担う役割は大きいことも分かった。</p>		

日時	3月1日(木)	氏名	小林 悠
テーマ	災害・復興そしてジェンダー平等：東日本大地震と津波		
主催団体	国連 NGO 国内委員会・国際婦人年連絡会・日本女性監視機構		
内容	<p>日本のサイドイベントには多くの来場者があり、席が足りないほどだった。世界中の人々が、今回の大震災に強い関心を抱いていることがわかる。田中正子氏（日本女性監視機構＝JAWW の代表）の司会でイベントが始まった。まず、江尻美穂子氏（国連 NGO 国内婦人委員会委員長）の開会挨拶、岡島敦子氏（内閣府男女共同参画局局长）の来賓挨拶が行われた。</p> <p>次いで、パネリストによる発表があった。パネリストと発表内容は以下である。</p> <p>(1) 青木玲子氏（全国女性会館協議会常任理事） 「全国女性会館協議会ネットワークによる東日本大震災の救援活動」</p> <p>(2) 原ひろ子氏（城西国際大学教授・女性と健康ネットワーク（WHJ）事務局長、JAWW 顧問） 「災害と復興過程における WHJ の活動」</p> <p>(3) 黒崎伸子氏（外科医、国連 NGO 国内婦人委員会） 「国際的な医療救援団体による災害救助活動の一例」</p> <p>(4) 平松昌子（BPW 国際委員会、国際婦人年連絡会世話人） 「激甚災害時に女性 NGO（BPW）として行ったこと」</p> <p>(5) 大内有子（日本 YWCA/YWCA） 「原発事故が引き起こした女性と子どもへの影響、福島の果樹園から見る農地再生に向けての女性主導の取り組み」</p> <p>(6) 久保田真紀子（JICA；ジェンダーと開発専門員） 「ジェンダーの視点にたった災害リスク削減」</p> <p>最後に、来場者との質疑応答が行われた。質問がたくさん寄せられ、震災の影響や、復興のための取り組みを理解しようとする人々が多数あった。</p>		
			
	日本の発表の様子		
感想	<p>会場に入りきれないくらいの大勢の来場者がみられた。東日本大震災に、世界中の人々が関心を寄せていることがわかった。</p> <p>震災時の支援の際に、女性への配慮をするということについて、今回のイベントで考える機会を得た。これまでは、被災地支援はまず安全の確保や食料の供給などが大事だと思っていた。しかし、プライバシーの保護や生理用品配布の際の気配り等、避難場所で安心して過ごせる環境づくりも重要であると学んだ。</p> <p>また、日本の NGO による被災地支援について学ぶこともできた。東日本大震災では多くの人々がボランティアとして被災地へ赴いたり、企業が様々なかたちで支援を行ったりした。しかしそれらは個の集まりで、継続的な支援ではない。日本の NGO が長期的に被災地を支援していくことが復興のために必要である。NGO が活動を続けていくためには、社会活動をしやすい環境づくりや、企業</p>		

	<p>からの理解が必要であると思う。また、日本政府も NGO と協力して支援活動を行わなければならない。そして、被災地で配慮の行き届いた、継続的な活動を行っていかなければならない。</p> <p>日本 BPW の活動は、働く女性の団体らしい支援を行っていた。「私たちの、私たちによる仕事づくり支援金」で助産院をサポートした。この支援は、助産師のマッサージの訓練に使用する毛糸のおっぱいを作っている高齢者の現金収入につながっている。訓練用品の製作者と、それらを使用する未来の助産師の両方に支援を行っているところが、特徴的である。会場では毛糸のおっぱいが披露され、来場者から注目を集めていた。BPW は雇用や職業訓練の機会をつくり出す被災地の団体の支援を行っている。支援のかたちは多種多様なのだ。</p>
--	--

### 【パラレルイベント】

日時	2月27日(月)	氏名	照井 奈々帆
テーマ	Rural Women and Widows in Africa: Roads to Empowerment		
主催団体	American Association of University Women		
内容	<p>アフリカにおける男性支配の社会下において、女性(特に未亡人)はどうやってエンパワメントされていくべきか。そういった女性たちのために、バングラデッシュのグラミン銀行で始まった「マイクロクレジット*」があるが、マイクロクレジットは本当に農村女性を力づけることができるのだろうか。という問いかけが主な内容である。近年マイクロクレジットが世界的に注目されてきていることもあり、それ自体が巨大化し、マイクロという本質的な側面が失われつつあることも否定できない。女性たちはこういった金融に頼るだけではなく、自らが抱える貧困や苦境を、CSW のような場で直接政府に対して訴えるべきである、という主張もなされた。</p> <p>*マイクロクレジット：貧困状態にあり、商業銀行から融資を得ることのできない人を対象とした、非常に小額の融資のこと。</p>		
感想	<p>マイクロクレジットというもの自体は大学で学んできたのだが、「貧困を解決する素晴らしいもの」というスタンスで授業を受けていたので、本当に女性を救うことが出来るのかというスケプティカルな視点から見たプレゼンテーションは非常に刺激的であった。確かに、どんな貧困対策にも弱点はある。「これをやればもう大丈夫」なものなど一つもない。農村女性たちは、与えられた貧困対策を黙々と受け入れていくのではなく、声を大にして政府に、いや世界に助けを求める活動をしてよいのだ。そんなパネラーの発言は、深く心に響いた。</p>		

日時	2月27日(月)	氏名	吉原 彩
テーマ	Girl' s Participation, Part1		
主催 団体	Working Group on Girls		
内容	Working Group on Girls で活動している学生と一緒に今回の CSW56 の事前テーマの原文や報告書を分かりやすい英語に直したりニュアンスや意味を解説していった。		
感想	<p>留学している様な気分だった。教室に行ったら学生で溢れかえっていた。7、8人のグループに分かれ今回のテーマ原文が渡され皆で解説し、ディスカッションした。人種も年齢も様々違う学生とのディスカッションはやはり日本の政府代表ブリーフィング同様、日本語で訳すと同じ意味でも英語の違いで微妙にニュアンスが異なる為、国々でニュアンスが異なり、そのたびに皆で話し合い意見をまとめるといったとても地道な作業だった。しかしなかなかこのような経験が出来ない私はとても貴重な経験になり、CSW56 が始まり一人参加の一発目がこのディスカッションでさらには日本人一人ということもあり、度胸がついたと同時に自分の語彙力のなさを改めて一発目で痛感した。</p>		

日時	2月28日(火)	氏名	小林 悠
テーマ	Social, Economic and Rights-based Employment of Rural Women and Girls in Russia's North Caucasus		
主催団体	Coalition of North Caucasus Women's Organizations		
内容	<p>このイベントでは、複数の女性がロシアの女性の現状と、問題解決のために自身が行っている活動についてプレゼンテーションをしていた。ロシアの rural 女性は肉体労働を強いられている。一日に3~4回、家から約3~4km離れた川まで水汲みに行く。そして薪を運び、乳絞りをし、畑を耕す。ときには自分の身体より大きくまとめた藁を山の下から上へと運ぶ。このように大変な作業を、男性は「ほんの少し大変な仕事だ」という。一方女性は車で男性が作業してくれることを望んでいる。</p> <p>ロシアに住むイスラム教徒は、経済的な問題から学校へ通うことができず、家事をしたり結婚したりする女性がいると話す。また、性病に感染してもどうして良いかわからない、子どもがたくさん生まれてしまう、という女性がいると言った。チャリティーホスピタルが設置され、そこでは最新の医学を提供している。また、女性に対してセミナーを実施し、啓蒙活動を行っている。</p> <p>DVの為に働く女性は、イスラム社会では、性差別について話してはいけない雰囲気があると話していた。入院する妻に対して夫が奇声を浴びせたり、叩いたりしている映像を見た。女性は「ひとりにして欲しい」と夫から顔を背けるものの、夫の暴力は収まらない。イスラム社会では夫が妻を労わるという考え方がない。最近では、この問題の解決のために、ジェンダーについて、また女性の権利や法について学ぶために、10代の女性に対して教育がされるようになった。まだ、男性がジェンダーについて学ぶ機会を設けることは困難であるが、一部のDVや女性への経済支援を行うNGOでは実施されている。</p> <p>女性研究センターでは、女性が抱える様々な問題に取り組んでいる。このセンターでは職業に結び付くような専門的な事柄を学ぶ。ここで学ぶ女性は誘拐され、若くして結婚させられた人が多くいる。これらの女性は精神的にも、肉体的にも結婚するには早すぎる。しかし家族のために結婚している。このように若く、未成熟なうちに結婚した女性の66%が離婚している。また、逮捕歴のある女性もここで学ぶ。囚人となった彼女達は家族に受け入れられない。センターで女性達は、専門的なトレーニングを受け、ビジネスプランを立てた後、起業するチャンスを得る。仕立てやヘアスタイルの分野でビジネスが成功することが多い。</p> <p>若い女性を対象としたSpring of LifeというNGOでは、女性は生きる権利があり、自身の人生のオーナーであると教える。イスラム社会で女の子は、親から「女の子は必要とされていない」と言われる。例えば、女の子が入院したとき、彼女が親から受けるプレゼントは男の子より少ない。女の子が教育を受けることの必要性は軽視されている。例えば、母親が外出する際には、長女は他の兄弟の世話をする責任があり、宿題をする時間を持つことができない。</p> <p>女性の人権問題に取り組む弁護士は、彼女の友人二人が若くして亡くなったことをきっかけに、法廷における女性の権利の改善に取り組み始めた。友人は夫から虐待や暴力を受けて亡くなったが、夫達は離婚を許さなかった。夫に暴力を受け、頭を約20cm縫った女性の夫は、たった9ヶ月の刑だった。このように女性は法廷では守られていない。</p> <p>1995年に創立され、ロシアで最も古い組織では、ソヴィエト崩壊で分断されたチェチェンの女性をサポートしている。心理的な面での救済を行っており、女性の精神的なトレーニングや、ビジネスのサポートを行う。</p>		

	<p>これらの他に、イスラムの女性は、結婚後容易に母に会うことができない、教育を受け続けることができないという問題がある。発表者の女性は、これらの問題をクリアする男性との結婚を望んでいる。上記の活動は、それぞれ別のプロジェクトであるが、互いに協力し合っている。例えば、問題を抱える女性に相応しいプロジェクトを紹介している。</p>  <p>ビデオを効果的に使いながら発表をしていた</p>
感想	<p>ロシアの農村部の女性の実情や、イスラム女性の現状についてよく理解できた。農村部では、女性のみが厳しい労働を強いられており、憤りを感じた。男性側に改善しようという意思が見られないことが最大の問題である。</p> <p>また、ロシアには多くのイスラム人が暮らしていることは、このワークショップを通して始めて知ったことである。イスラム女性が男性に虐げられていることは、よく知られているが、ジェンダーの問題についてイスラム教圏で公然と話すことができないことは知らなかった。男女の不平等について議論することも許されない環境の中で、女性に対する教育、特に女性の権利に関する啓蒙活動が進んでいることは、これから男女平等の社会をつくる上で非常に重要である。一部では、若い男性に対する男女平等の教育が行われているようで、近い将来イスラム圏でも男女平等の考えが育つことを期待している。</p>

日時	2月29日(水)	氏名	吉原 彩
テーマ	Women and Power: Leadership in a New World		
主催 団体	Women's Research Institute		
内容	<p>4名の社会で活躍されている女性達が集まったの討論会。普段はそれぞれ別々のNGOで活動している。女性のワークライフバランスや社会での役割、男性とは違い女性目線からのNGOでの活動、社会貢献から子育てとの両立までバックグラウンドの違う4名の女性が現在に至るまでどう活動してきたか。またこれから女性に求められる事とは。</p>		
感想	<p>一つの団体での活動報告、現地の状況報告とはまた違う、NGOで活動している女性の生活スタイルといったどちらかという就職活動の講演会のような内容だった。しかし、NGOで活動されていてやはり女性の社会的地位の向上といった共通概念は今回のCSW56ととてもマッチしていたので、ただの働く女性の講演会とは違い世界のruralな女性を救いたいというパワーを感じた。またそれぞれ女性として仕事をしている事以前に母である事、家族を大切にしている延長線上にこの様な活動があり、仕事があるのだという当たり前だが普段日本人が見失いそうになる一番根底の部分を4名の女性は共通して語っていた所にとっても思いやりを感じたし、興味深かった。私自身この考え方を常に心がけ何事にも思いやりを持って仕事をしていきたいと感じた。</p>		

日時	2月29日(水)	氏名	平野 歩
テーマ	Rural Women Speak: Land, Health and Rights in Africa		
主催団体	FEMNET (African Women's Development & Communication Network)		
内容	<p>アフリカのジンバブエやケニア、モザンビーク、ザンビア等の国々から1人ずつ現地NGO代表などがパネリストとなり、自国における活動について発表した。それぞれ話すテーマ(分野)が異なり、国によって、地域によって最優先課題が異なることが感じられた。2カ国の例を挙げる。</p> <p>ジンバブエの経済プロジェクトでは、“green economic”を重視している。移民の増加によって、森林伐採が急速に進んだ。それは、経済問題だけでなく環境問題にも深く関わる問題である。そこで、「木を切らずに果物だけを採集する」「その果物の質にこだわり、果物そのものの販売や副産物(油や石鹼など)を製造して現金収入を得られるようにする」という取組みを行っている。</p> <p>モザンビークでは、「環境保護」と「ジェンダー」の関係に注目した取組みが行われている。Ruralで生活する女性は気候変動の(悪)影響を受けざるをえない状況にある。環境問題に取り組むことで彼女たちの人権を守っていく、また彼女たちの権利を尊重することで環境問題に向き合おうとしている。今の環境のなかで、どのように農作物を育てていくのか指導したり、それぞれが抱える問題を互いに議論し共有することで、問題意識を高めたりする活動を行っている。</p>		
感想	<p>討論の最後に「発表にあったような現状にある rural women たちにとって必要なものは何か、最優先すべき課題は何か」という問いにパネリストたちが1人ずつ答えていった。それは私がこの発表を通して1番聞きたいことであった。案の定彼女たちの回答は異なっていた。「経済的なサポート」「問題(解決)に関する知識」「インフラストラクチャー」「国際的基準のリテラシー、教育」などである。</p> <p>言ってみればこれは rural women のニーズである。当然のことながら、国によって、地域によってニーズは異なるし、優先順位は異なる。支援する側の恣意によって解決に取り組んでもその力は発揮されないだろう。当事者たちの声を聞き、その声をふまえた上で協働していくことが、世界が抱える課題に取り組むうえで重要なことではないだろうか。</p>		





日時	2月29日(水)	氏名	平野 歩
テーマ	Rural Women's Concerns: What Do Gender, Race and Class Have to Do with it?		
主催団体	United Methodist Women		
内容	<p>このパラレルイベントは他のイベントとは趣向が異なっていた。はじめに、参加者含め会場に集まった人々でエクササイズをする。立ち上がり、空に右手で円を、左手で三角を描く、右手で名前を書きながら右足で円を描くなど、少し頭を使うものである。「難しい」「出来ないよ」など、会場内で声があがり場があたたまったところで本題である。</p> <p>「言語による障壁」「宗教」「人種」などに関して、自分もしくは友人の経験を共有する。実際に人種差別を受けたこと、父親から女の子だからと言ってひどい扱いを受けたことなどを参加者たちが話していく。その中の1人の話を選び、参加者たちから数人の有志を募り、実際にそのショートストーリーを劇にしてみんなの前で発表する。その後、劇中で「この部分(セリフや行動)が変わればよいのではないか?」と提案していくのだ。参加者たちを巻き込んでいくので、とても興味深く、楽しく参加できた。</p> <p>劇の選ばれたストーリーはタンザニア出身の女性の実体験によるものであった。</p> <p>学校に通っていたが、ある日父親から結婚するよう強要される。父親はその相手から娘との結婚を条件に牛をもらうことになっていた。結婚を拒否した娘(本人)と妹(または姉)、娘たちを擁護した母親の3人は家を出される。その後、なんとか生計をたてようとし大工仕事が出来た妹が家具屋をはじめ、椅子を作り販売した。しかし、その椅子の作り手が妹であることが分かった。「女が作ったものだから」と言って買ってもらえなかった。</p> <p>会場からは様々な提案が出された。</p> <p>このように実際にあった話を共有し演じることで、よりリアリティを持って問題を考えていこうという取り組みであった。</p>		
感想	<p>参加者から話を出してもらい、その場にいる人々で共有するというのはとてもおもしろい取り組みだと思った。実際に経験した人の話を直接聞くことで、自分から遠かった問題が少し近く感じられた。</p> <p>ショートストーリーを共有する中で、1番記憶に残っているのはマラウイ出身の女性の言葉である。「私は教育を十分に受けてきませんでした。だからポルトガル語しか話せないし、理解できません。今この状況(パラレルイベントのこと)で言語の障壁があります。」と友人の通訳を介して話した。この場で私は少しは英語が話すことができ、相手の言葉も理解できる。しかし私自身海外に行ったときに現地語での会話は全く分からず、理解できないもどかしさと不安を感じたことがある。「言語」というのは相互理解のために欠かせないツールだと言える。そのツールが「障壁」となってしまっているときは、そこから取り組んでいかなければならないのだろうか。</p>		


日時	3月1日(火)	氏名	吉原 彩
テーマ	Women, War and Peace (Film SCREENING SERIES)		
主催団体	Permanent Mission of Norway to the United Nation		
内容	戦争時の女性と暴力を描いたドキュメント。アフガン、イスラエルの戦争下の女性の実情。戦争に行く夫を支える妻と子育て中の女性。戦争中に子供を出産する女性。女性の戦争教育、子供の教育。UNの報告など。		
感想	<p>2時間位のドキュメント映画だったが、終始目を奪われる様な衝撃的な映像と内容でとてもヘビーだった。戦争の行く夫を支えているのは妻であり、女性なのに、夫のストレスのはけ口が妻への性的暴力というなんとも言えない内容だった。またここにいる女性達はこの生活が普通で受け入れている、ある意味洗脳されていると感じた。そしてこの様な環境を見ている子供達もこの生活が普通に育ってきており、ある程度中学生位になると軍に参加する、幼い頃に遊びが戦争ごっこという負のスパイラルを感じた。UNでは現在も女性に経済教育を施し、支援していると話していたが、支援を受けられているのもごく一部でまだまだこの様な地域には支援が足りない、援助が足りないのが実情だと話す。なかなか日本に居ては触れる事のない内容だったが、同じ地球上でこの様な事が現在も行われているという現実をもっと知るべきだと思ったし、なぜ今現在も戦争をしているのだろうかという政治的な所まで疑問を感じた。宗教対立等問題は様々あるが、戦争をしている男性がストレスのはけ口に女性に性的暴力振るうなど一番あってはいけないことで、早期に食い止めるべき一番の内容だと感じた。今の今始まった事ではないし、戦争が100%無くす事は不可能かもしれないが今回のCSW56のメインテーマの根底にある問題とも感じた。rural womenを経済的に支援する事も大切だが、一番早期に取り組むべき課題は古い負の宗教的な既成概念新しい概念に教育し直す事だと感じた。男性と違い女性の社会的地位は様々場所場所によって求められる為、その場所にあった教育を私達先進国の女性達が発信していかなければならないと感じた。日々目を覆いたくなるような現実も今はFacebookの様な何時でも何処からでもタイムリーに情報が発信される世の中なのだからUNの方々も話していたが、そのような情報を日々のニュースとして受け入れ、考えなければいけないと感じた。あまりにも衝撃的だった。</p>		

日時	3月2日(金)	氏名	小林 悠
テーマ	The Empowerment of Women During and After Conflict Situation: Afghanistan and Rwanda		
主催団体	Rwanda Association of University Women		
内容	<p>ワークショップの発言者は実際にジェノサイドから生き残った女性であった。彼女の親族は殺し合いをした。しかし彼女は復讐をしない。なぜなら、許さなければ復讐が続くからだ。自分が復讐をすれば、自分も誰かに復讐される。復讐の連鎖は断ち切らなければならないのだ。ルワンダの紛争が1994年に終結した後、ルワンダの社会は再構築された。そして、平和へと向かっていった。再構築の成功は、政府の協力が大きく貢献した。ルワンダの地域共同体で行う「ガチャチャ」と呼ばれる裁判ではジェノサイドに関する裁判が行われた。</p> <p>ルワンダではジェンダーに基づく暴力(Gender Based Violence=GBV)が行われている。例えば、DV、夫が外で飲酒し妻に暴力を振るう、妻は望まない妊娠をして5人以上子供をもうけるなどである。また、レイプの被害に遭っても、警察に通報できない女性もいる。これは父親や家族の尊厳を失わないためである。この問題を解決するために、国家的なジェンダー政策がとられ、ジェンダー平等の法律が設けられた。また、ジェンダーモニタリングオフィスも設置されている。</p> <p>教育を充実させることも重要な課題である。ルワンダの子供たちは学びや情報に飢えている。教材や文房具が不足している。また図書は西洋のものが中心である。しかし、必要なのはアフリカの本なのだ。それでも、子供たちはタフに学んでいる。</p>		
感想	<p>以前「ホテル・ルワンダ」を観たことで、ルワンダ紛争を生き抜いた人が、平和についてどのように考えているのか関心を持ったため、このワークショップに参加した。ジェノサイドの悲惨な経験をした発言者が「復讐を繰り返さない」「紛争のサイクルはルワンダ市民が原因である」と語ったことが印象的だった。私は紛争の原因は、ルワンダ政府や利害関係国だと理解していた。しかし、政府など他者に責任を押し付けるべきではないと考えさせられた。現状を改善するために必要なのは、市民一人ひとりがより良い社会をつくるために行動を起こすことなのだと改めて考えた。</p>		

日時	3月2日(金)	氏名	照井 奈々帆
テーマ	Raising a Voice: Young Women from Asia Pacific Region Speak Out		
主催団体	Asia Pacific Women's Watch		
内容	<p>主なテーマは、同性愛者(レズビアン)の権利についてである。アジアの多くの地域で、同性愛はタブーとされ、同性愛者は差別対象となっている。しかし同性愛そのものがだめなわけではなく、例えばタイなどではゲイが市民権を得ている。しかし多くの国で、レズビアンはゲイ以上に理解できないものと認識され、ゲイよりも風当たりが強い。結婚できないこと、愛する人と結ばれないこと、将来の展望が見えないことなどを理由に自殺を図るレズビアンも少なくないという。彼女たちは、恋愛面で多少他の人と違う好みを持っているだけなのに、なぜこうも苦しい思いをしなければならないのか。アジアの各国政府はレズビアンの結婚や恋愛を正式に認めるべきである、という主張が主なパネルディスカッションであった。</p>		
感想	<p>アメリカで、黒人差別や同性愛差別を撤廃しようと公民権運動が起こされたのが1960年代。その結果、現在マサチューセッツやカリフォルニアでは同性婚が認められている。しかしアジアではどうだろうか。レズビアンであるがゆえに、自殺したり恋人と別れざるを得ない女性たちがとてもたくさんいるという。白人が黒人を嫌ったように、ヘテロセクシュアルはホモセクシュアルを嫌う。こういう差別はやめなさい、少数を認めて多文化共生社会を作りなさい、ということは歴史的に何度も何度も唱えられてきたことである。けれども、まだまだ同性愛者が苦しんでいるという現実がどうにも私には理解できない。私の友人にもホモセクシュアルの人がいるけれども、私はその人を変だとか気持ち悪いと感じたことは一度もない。彼はごくごく一般的な男性である。私たちの瞳が黒かったり茶色かったりするように、恋愛対象が女性の人もいれば男性の人もいるというだけで、何も可笑しくないことだ。そんな当たり前のことを、なかなか認めることができない社会には憤りしか感じる事が出来ない。パネラー達の中には、涙を浮かべて自殺したレズビアンの話をする方もいた。彼女たちの訴え政府に届き、同性愛者が生きづらさを感じないような社会づくりが早く為されることを願うばかりである。</p>		

日時	3月2日(月)	氏名	照井 奈々帆
テーマ	Redefining Empowerment for Women: Psychological & Physiological		
主催団体	Endeavour Forum Inc.		
内容	<p>この Parallel Event のテーマは、人工中絶反対である。パネラーたちは高校生で、キリスト教系の学校に通っており、そのクリスチャンとしての精神から中絶反対を訴えていた。命は受精の瞬間から誕生しており、アメリカの憲法には年齢に関係なく人権は与えられるべきだとの条文があることを理由として中絶反対を語っている。中絶の大きな原因でもある貧困だが、果たして中絶することによって貧困を解決することはできるだろうか。もし何も解決されないならば、おなかの子どもが死ぬことに一体なんの意味があるだろうか。命さえあれば、たとえ貧困で苦しい思いをしたとしても、政府や途上国に援助を行う NGO の力を借りつつ生きていくことはできる。その中で、幸せを見ついたり楽しみを見出していくことも不可能ではないはずだ。でも、殺されてしまえばそこで全ておしまいだ。その子どもは何も悪くないのに。と、彼らは涙ながらに語っていた。また一人っ子政策のために中絶の件数が非常に多い中国で、女の子であったために生まれてすぐ捨てられた少女もパネラーとして登場した。彼女は産みの親を知らないという非常に悲しい過去を持っているけれども、「親には感謝している。多くの人が中絶をしていて、産まれることすらできない子が非常に多い中で、私はこうして生きることができているのだから。」と涙ながらに語っていた。</p>		
感想	<p>私は自分の浅い知識で中絶に反対か賛成かを唱えることはできない。中絶に関する論争は昔から世界中で行われてきているし、私が思いつくような理論なんてとっくに出つくされていると思うからだ。しかし、ただ一つ私が言えるのは、それだけ長いあいだ論争が続いていても多くの国で中絶が行われているという現実から言えることは、やはり中絶を必要とする女性が多いということに他なく、彼女たちが必死に考えて出した答えが中絶だというのなら、一概に否定することもできないのではないかということだ。</p> <p>このワークショップでは、私より若い高校生たちが非常に論理的に、そして感情的に命の大切さを訴えていたことが、非常に心に響いた。私も彼らのように若いうちからいろいろなことを考え、他者に訴えかけていくことができるような機会をもっと持ちたいと感じた。</p>		

日時	3月2日(水)	氏名	吉原 彩
テーマ	innovative development programmers by rural women		
主催 団体	Zimbabwe in UNDP		
内容	ジンバブエの情勢と女性の社会的地位、男女差別、暴力といった問題について UNDP の関係者やジンバブエ政府の関係者（日本の外務省の様な政府関係者）による報告会。またジンバブエ女性の International Rural Women's Day の映像から見えるジンバブエの現状とは。		
感想	友人がジンバブエで青年海外協力隊に参加している為どんな所で活動しているのかと思い参加した。ジンバブエの様子は友人のブログをたびたびチェックしているのでなんとなく知っていたが、ジンバブエの女性の80%は rural women で農業で生計を立てている事、また男性よりも女性の方が働いているのに男性の方が権利を主張している事を知った。しかし農業で成功している女性は最近地位が男性よりも向上してきている為、女性は外で働き、男性は家で主夫をする家族が増えてきているようだ。（日本でちょっと前に流行ったなと感じた。）一方、International Rural Women's Day では女性がジンバブエ市内をデモ行進している様子や市場で自分が収穫した野菜を売って、家に帰るといった様子が紹介された。友人に後からどうだったと聞かれこの話をした所、たしかに普段市場で野菜を売って歩いている女性は見ると捕まってしまうよと聞き、Rural Women's independent Day だから特別に許可されてああいう活動をしていたのかと最後に少し疑問が残った。		

日時	3月5日(月)	氏名	小林 悠
テーマ	Activities of Medical Women's Association of Nigeria		
主催団体	Medical Women's Association of Nigeria		
内容	<p>Medical Women's Association of Nigeria (MWAN)とは、非政府、非営利、非宗派の組織で、ナイジェリア女性の医者や歯科医師が所属している。MWANは1976年に設立され、25の州に支部を持っている。組織の目的は、ナイジェリアにおける女性や子供の健康を改善することである。また、医療に携わるナイジェリアと他国の女性とが医療に関してコミュニケーションを取ったり、協力し合ったりすることも行う。さらに、どのような人種、宗教であるか、政治的見識を持つかに関わらず女性の医療に対する関心を促進している。そして、女性が医療を学ぶことを奨励している。同時に、女性が医療を海外で学ぶための研究プロジェクトや奨学金を与えている。</p> <p>健康プロモーション活動を、市場、若年軍キャンプ、学校、避難民などに対して行っている。プロモーションの内容は、啓蒙活動、糖尿病・高血圧・頸部と乳ガンのスクリーニング、リプロダクティブヘルツのワークショップ、保健教育などである。</p> <p>MWANは、いくつかの会議の代表をしている。例えば、妊産婦死亡率に関する医療利害関係者の会議などである。ナイジェリアでは墮胎は違法とされているため、出産によって命を落とす女性が多いのが現状である。この組織は、Nigeria Medical Associationや、ホワイトトリボン協定に参加し、母性の安全のために活動している。</p>		
			
	発表者の女性医師たちと		
感想	<p>ナイジェリア人の女性医師が組織を作って女性や子供のための医療活動を行っていることに、少なからず衝撃を受けた。なぜなら、医療分野で国際協力をする団体が日本を始め先進国に多いので、アフリカには医療活動を精力的に行う女性が多く存在することを考えたことがなかったからだ。この組織だけではなく、CSWにはこれまで発展途上国だと考えていた国の、知的で活動的な女性と出会った。発展途上国とは援助が必要な国であるという考えは改めなければならないとひしひしと感じた。MWANの活動の素晴らしい点のひとつは、ナイジェリア中に25の支部を設置している点である。テレビがなく、情報を入手することが困難な女性に、支部の医師が直接医療支援を行っており、直接的な医師との関係が女性の健康知識の啓発となっている。医師が女性へ直接医療情報を伝えることは、日本でも有効な啓蒙活動となると考える。日本でも子宮頸がんや乳ガンのプロモーションが行われているが、テレビCMやポスターによるもので実感がわきにくい。医師と女性が直接関わる機会が設けられれば、女性が健康について考える契機になるのではないだろうか。</p>		

日時	3月7日(水)	氏名	平野 歩
テーマ	Situation of Rural Women Affected by the Great Japan Earthquake and Nuclear Power Plant Accident		
主催団体	Human Rights Now		
内容	<p>3.11の東日本大震災に際し起きた「原発事故」がもたらした被害、日本の現状について報告された。</p> <p>災害時に開設された避難所の代表者はほぼ男性であった。宮城・岩手・福島の3県においては女性代表者は1人だけであり、多くの女性は避難所の食事係を担当していた。これは常時の日本社会におけるジェンダー格差の表れであろう。また定職に就いてきた男性の70%が職を失ってしまった今、常時から職を得るのが困難なシングルマザーや外国人女性の職・生活はどうなるのだろうか。</p> <p>原発に関していえば、日本政府からの情報が国民にはなかなか詳細が明かされなかったのに対し、米国政府には開示していたことも指摘していた。</p> <p>実際に原発事故のために福島から他の地域に避難して生活している2家族(母親と子どもたち)が来ており、震災当時のこと・避難生活のこと・今の心境などを語った。</p>		
感想	<p>まずは会場に集まった日本人以外の人たちが多くいたことで「原発」に関して、多くの国の人々が関心を抱いていることを感じた。</p> <p>2家族の生の声、特に2人の子どもの話は外国人だけでなく、日本人参加者にも響いただろう。福島に住む父親とは月に1度しか会えない、小学校の友達とも別れ別れになってしまった。そんな彼らが口にした「なぜ大人たちは『原発』が危険だとは考えなかったのですか？」という問いは原発保有国に住むものにとって、重い問いかけだっただろう。</p>		



【その他のイベント】

日時	2月26日(日)	氏名	平野 歩
テーマ	Consultation Day		
主催団体	NGO CSW New York		
内容	<p>翌日から始まる CSW に向けたプレ開会式のようなもの。National Dance Instituteに所属する子供たちのパフォーマンスから始まった。NGO CSW New York 代表や、UN Women 事務局長からコメントを頂いた。また、『The empowerment of rural women and their role in poverty and hunger eradication, development and current challenges』というテーマについて、地域毎の発表、rural に住む女性たちによる発表があった。またスペシャルゲストとしてノーベル平和賞受賞者 LeymahGbowee 氏から CSW へのメッセージを頂いた。</p> <p>午後は、①初めての参加者のためのオリエンテーション、②Advocacy Training、③Rural に住む女性リーダーたちのためのトレーニング、という3つに分かれてセッションがもたれた。</p>		
感想	<p>CSW の一番初めのイベントということもあり、緊張と不安でいっぱいであった。会がスタートすると、英語で溢れる場内にこれからの2週間に気が重くなったことは事実だ。しかし一方で世界中の女性たちの熱さに圧倒され、この人たちと2週間一緒にイベントに参加できるのかという興奮もあった。</p> <p>実際にノーベル平和賞受賞者のお話を直接聞く貴重な経験も得られ、午後のセッションでは CSW 初心者のために、CSW の説明から始まり、会期中のイベントの仕組みなどをレクチャーして頂き、とてもよかった。</p>		

日時	2月28日(火)	氏名	小林 悠
テーマ	BPW Briefing		
主催団体	International Federation of Business and Professional Women		
内容	<p>CSW 開始前に、マレーヒルのホテルに BPWI のメンバーが集まった。ここで私たち日本人インターン生は厚い歓迎を受けた。メンバーが前日参加したイベントについて話す時間が設けられ、イベントで得た知識や情報、そこで考えたことを共有することができた。また、メンバーが主宰するイベントの告知もここで行われた。ここで告知されたイベントに私たちインターン生も参加する機会を得ることができた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">BPWI の朝のブリーフィングの様子</p>		
感想	<p>早朝からこの Briefing が開催されたのにも関わらず、BPWI のメンバーは精力的に参加したイベントの情報を共有しており、CSW に参加することへの意識の高さを感じた。私たちインターン生を暖かく受け入れてくれたことに感動を覚えた。世界中に男女共同参画に取り組む女性がいるということはとても心強いことである。女性の一人として、私も男女平等の社会の実現に向けて行動しなければならないと強く感じた朝だった。</p>		


日時	2月29日(水)	氏名	照井 奈々帆
テーマ	Equal Pay Day Event		
主催団体	International Federation of Business and Professional Women		
内容	Equal Pay Day とは、男性と女性間の Pay Gap を埋めることを目標とした活動のことで、参加者たちは赤い服装に「Equal Pay Day」と書かれた赤いバッグを持ち、男性と女性の Equal Pay(平等な給料)を訴えかけるものである。この Equal Pay Day Event では、BPW の幹部たちがこの活動の歴史や各国の Equal Pay Day をプレゼンテーションして下さった。		
感想	<p>BPW の President や Vice の方など、多くの幹部の方たちが全世界における Equal Pay の大切さを語っていることには、とても心を打たれた。そして私自身このイベントをとっても楽しんで参加させていただいたのだが、最後に President の方が「このイベントがあるということは、まだ Equal Pay が成されていないということ。このイベントが無くなることが一番なのだ」ということを話されており、改めてこのイベントが存在するところの意味を考えさせられた。</p> 		

日時	3月2日(金)	氏名	小林 悠
テーマ	Luncheon		
主催団体	UN Women		
内容	<p>UN Women が主宰するランチョンは、国連本部で行われた。今回は国連本部が改装中のため仮設の施設でのランチョンとなった。費用は高価であるが、美味しい食事、ミュージカルパフォーマンス、スピーチを堪能することができた。ニューヨークのアーティストによるパフォーマンスはEllen Kayeによる”When I Was A Boy” という歌だった。パフォーマーは私たちと同じテーブルで食事をしており、大変フレンドリーだ。スピーチはAnwarul K. Chowdhury (バングラディッシュ大使、元国連事務局長) と Jeni Klhgmán (世界銀行におけるジェンダーと開発の局長) によるものであった。</p>		
			
	ランチョンの様子	ニューヨークのアーティストと	
感想	<p>ランチョンは\$150と高価ではあった。しかし、美味しい食事とニューヨークのアーティストによるコンサート、国連関係者と世界銀行のスピーチを聞くことができる上、UN Women への寄付でもあるので妥当だと考えることができる。偶然会場入り口で居合わせたバングラディッシュ女性と同席することとなり、交流を深めることもできた。CSWでは女性が抱える医療、教育、職業、人権に関する問題など、深刻で重要なテーマを扱っているが、問題について考えることは必ず会議室やワークショップの中で行われなければならないというわけではない。今回のランチョンのように、カジュアルな雰囲気の中でも問題について考えることができるのだ。</p>		

日時	3月2日(金)	氏名	照井 奈々帆
テーマ	日本政府国連代表部ブリーフィング①		
主催団体	日本政府国連代表部		
内容	CSW56における日本の決議案、日本以外の決議案、そして現段階(当時)での合意結論がどこまで至ったかを丁寧に説明して下さった。3.11の大震災を受けて、日本の決議案では community を基盤とした inclusive な社会づくりを提案したことや、災害後における女性への暴力を予防する、など、災害時に女性をどう援助していくかということに重点が置かれていたようである。		
感想	英語だとなかなかついていくことのできない非常に難しい問題であるために、今回の日本人参加者を対象とした日本政府のブリーフィングは頭を整理するためにも、非常にありがたい存在だった。community を基盤とした inclusive な社会づくり、など多少漠然としていて中身のよく見えない決議案などもあったのだが、そういった内容に関する質問に対しても丁寧に対応してくださったので、日本や各国が CSW においてどのように動いているのかというのを明確に見ることができたように思う。		

日時	3月7日(水)	氏名	照井 奈々帆
テーマ	International Women's Day		
主催団体			
内容	IWD とは日本では「国際女性デー」と訳され、1904年のニューヨークで起こった婦人参政権デモの記念日である(参照: Wikipedia)。本当は3/8のイベントなのだが、今回のCSW56では7日に国際女性デーを記念したイベントを行った。今年の国際女性デーのテーマは、「Connecting Girls, Inspiring Futures」であり、CSWでは今年のCSW優先議題である農村女性のエンパワメントと交えて女性のこれからが語られた。		
感想	会場も非常に立派で、一つ一つの席にマイクが設置されているような大会議室。参加者は満員御礼どころか、席に座れず後ろで立ち見している人が何十人もいるという大人気イベントであった。CSW参加者たちが、女性に関する記念日である国際女性デーに参加することで、気持ちを一つに女性の地位向上を目指している姿はとても感慨深かった。話される内容はそれまでのNGOのイベントとそこまで大差はなく、「これからは女性が引っ張っていく時代だ」「農村という場所から女性を変えていこう」というようなものだったが、このイベントはそれぞれの小さなParallel Eventや、Side Eventたちの集大成のようなものだろう。		

日時	3月7日(金)	氏名	平野 歩
テーマ	日本政府国連代表部によるブリーフィング②		
主催団体	日本政府国連代表部		
内容	1回目のブリーフィング内容の確認と、合意決議案の進行状況の説明を受けた。2回目ということもあり、NGO参加者側からの質問に答えて下さる形で進んだ。また、潘基文事務総長の国連内における女性雇用の取組みなども教えて頂いた。		
感想	<p>前回のブリーフィングは、決議案の内容についてご説明して頂いたが、今回は合意にもっていくプロセスや裏事情などが聞けて大変興味深かった。</p> <p>例えば、自然災害に関する決議のイニシアティブは日本が握っているかどうか、という話では、実際に自然災害を多く被っているのはアフリカをはじめとする途上国である。彼らからすれば、今回イニシアティブをとっている日本へ反発を覚えることもあるだろう、などということだ。これらは考えてみれば当然のように思うのだが、指摘されるまで気がつかなかった。どうしても、決議等は結果に注目してしまうが、その過程にも色々な人々の思いが詰まっていることを感じた。</p>		

日時	3月8日(木)	氏名	平野 歩
テーマ	International Women's Day Celebration March --		
主催団体	NGO CSW new York		
内容	<p>国際女性デーを祝したイベント。Global Women for Equality, Development &amp; Peaceをテーマに掲げ、1人1人が黄色い襷にメッセージを書き国連本部近くの通りを行進してアピールした。</p> <p>行進の終わりには集まった人々で円になりCSWのテーマソング“Keep on Movin' Forward”を歌ったり、太鼓や笛を鳴らしながら踊ったりした。</p>		
感想	<p>始めてマーチングに参加したが、とても楽しかった。始めは「黄色い襷かけて歩くなんてちょっと恥ずかしい」などと思っていたが、最後の方はアフリカの方々と一緒に踊ったり、歌ったりとても盛り上がった。</p> <p>「日本人の若い女の子たち」というだけで、声をかけて下さったり、写真を一緒にとって下さる方もいた。年齢も人種も言葉も異なるのにも関わらず、CSW56に集った女性たちというだけで仲間となれたことを体で感じた。</p>		
			

## 2. インターンシップを振り返って

### 平野 歩 津田塾大学 2年 (参加時)

2012年2月26日~3月9日まで、第56回国連女性の地位委員会(Commission on the Status of Women、以下CSW56と表記)に、日本BPW連合会からのインターン派遣生として参加させて頂き、ニューヨークで行われる国際会議へのインターン生として参加するという貴重な経験を得ることができました。出発前の準備でお世話下さった宇佐美様、日本でもニューヨークでもなにかとご配慮下さった平松様、柳下様、現地でご指導下さった黒崎様、そしてBPW会員の皆様にこの場を借りて御礼申しあげます。

今回CSW56への第9回インターン派遣を知ったきっかけは在籍している大学からのメール案内でした。応募を決めた理由は主に2つ。1つは、アメリカ、ニューヨークへインターンとして行けるからであり、2つ目は国連本部内に入り、実際に行われている国際会議に参加することができるからでした。正直に言えば、BPWの理念やCSWのテーマである「女性の地位」というものに特に強い関心があったわけではありませんでした。発展途上国における様々な問題(貧困、衛生、教育など)を考えたときに「女性」というのはキーワードではありましたが、私自身の中でどちらかと言えば「フェミニズム」に苦手意識を持っていました。インターン派遣決定後、国内で開かれた「第56回CSW及びリオ+20について聞く会」や「CSW56勉強会」に参加した際、今回のCSW56のテーマである“the empowerment of rural women and their role in poverty and hunger eradication, development and current challenges”に関して、日本のrural areaでも様々な問題があり、日本各地に「女性の地位」に関して意識を持っている方々がこんなにおられるのかと驚きました。(例えば、私自身が実際に東日本大震災の被災地で各避難所を巡回して活動していたこともあったのに、この勉強会で「避難所の代表者のほとんどが男性である」という指摘を受けるまで気にしたことはありませんでした。)また、そうした意識を持って集まってこられた方々が私が想像していたよりもご年配の方が多かったこと、そして、当然のことながら集まったみなさんの知識量とその問題解決に向けてのアクティブさにも驚きました。自分の絶対的知識不足と関心の薄さを抱えながら、ニューヨークへと向かいました。

ニューヨークでの2週間は本当に充実した密度の濃い日々でした。Consultation dayから本格的に始まったCSW56ですが、最初の2,3日は英語がほとんど分からず焦りと不安でいっぱいでした。しかし、少しずつ耳も英語に慣れてきて参加したイベントの概要は少しずつ理解できるようになってきました。

私が参加したパラレルイベントの数は約25ですが、その主催団体の多くの方々は実際にrural areaで生活し、その現場で女性の地位向上のために、またそうすることによって地域や社会が抱えている問題を解決しようと、取り組んでおられる女性たちでした。大学の講義や文献からでは分からない、現場の彼女たちの生の声とそのパワフルさに圧倒されました。そして所謂「支援活動」は先進国から途上国に対して行われる、という流れはもう過去のモノになっていることも感じました。参加団体の多くは自分たちの国の問題は自分たちで解決する、というのが基本姿勢でした。

このCSWインターンを通して、本当に貴重な体験、日本では得ることができないであろう経験をさせて頂きました。まずは、何といても世界各国から人々が集まり、発表し議論していく国際会議、国際イベントの雰囲気を楽しむことができました。特にパラレルイベントでは、様々な国からの参加者がいることで意見や質問も多角的であり、何よりも活発に質疑応答が行われていました。ほとんどのイベントの発表後には、参加者たちがパネリストやモデレーターにどんどん質問したり、発表者の活動や意見に賞賛或いは反対する意見を述べたり、自論を主張したりと、かなり活発に意見交換が行われていました。今まで経験してきた話し合いや発表の場で、あれほど参加者側から質問やコメントが出たことはありません。日本人は空気を読む文化であり、多くの外国は全てを言葉で言わな



れば伝わらない文化だとよく言われます。しかし、これだけバックグラウンドが異なる人々が集まる場ではどんな些細なことでもどんどん言葉に表さなければ伝わらないのだと気付きました。「もっと英語が話せたら私も何か言えるのに！」と思う反面、「私にはここで何か意見できるほどの考えを持っているのか」と思うこともありました。しかし、せっかくニューヨークに来たのだから！と思い、気付いたあとはなるべく個人的にでも「プレゼンおもしろかったです」の一言だけでもパネリストに伝えるようにしました。

そして私にとってもう1つ大きな成果は、関心は新たな分野にも広がったことです。特に日本国内における「女性問題」「ジェンダー問題」への関心です。これから、自分自身が女性として日本社会、国際社会にでていくことを考えたとき、この問題は自分にも関わる問題として考えていかなければならないと思いました。特に日本は先進諸国の中では「ジェンダー」の意識が低く、その一方で男女間の社会的格差は世界レベルで見ても大きなものであるといえます。パラレルイベントだけでなく、BPWによるEqual Pay Dayのイベントに参加したこともあり、これからの社会を創っていく私たち若い世代がもっとこの事実我真摯に向き合うべきだと強く感じました。出発前には関心の薄かった「女性」というテーマですが、これに興味を持ったことで今までとは違う視点で世界のことを考えられるようになってきたと思います。

今回CSW56を通じて出会った女性たちは、アフリカ人・アジア人・欧米人問わずとても活気に溢れている方々ばかりでした。私の拙い英語での質問にも丁寧に答えて下さったタンザニアの方、母国の現状を訴えながらも日本の災害を心配して下さったエチオピアの方、International Women's Dayのイベントで上手く言葉が通じなくても一緒にmarchingに参加して踊ったアフリカの方々…。今、私は大先輩方が与えて下さった刺激を忘れず、この素晴らしい経験を糧に、自分ができること、将来何がしたいのか考えています。1人では何もできなくても、1人1人が集まれば大きな力になるんだと改めて感じた2週間でした。私もその1人になりたいと思います。

#### 小林 悠 山梨県立大学4年（参加時）

ニューヨークでは、毎日中身の濃い、充実した日々を送ることができました。私たちにインターンの機会をくださったBPWの皆様、出発前にお世話をしてくださった宇佐美様、現地で指導して下さった平松様、柳下様、黒崎様、ご支援くださった山梨BPWの皆様、山梨県立大学の先生方には大変感謝しております。

大学では山梨県の地域振興に取り組んできました。まちづくり、まちおこしも呼ばれる地域振興の活動に携わってきたのは、住みよい地域をつくることで、国際問題の改善に少しでも貢献したいと考えたからです。一つひとつの地域を活性化し、地域住民の生活が豊かになることで、世界が豊かになるのではないかと考えています。私が行った活動のひとつに、女性の知恵委員会があります。この委員会では、女性の視点で山梨県へ政策提言を行いました。委員会に参加する女性の中には、女性の雇用機会の創出や、ワークライフバランスについて政策を考える女性がいました。これまで学生生活で性差による不平等をあまり感じる事のなかった私にとって、ジェンダーについて考える契機となりました。

このインターンへの参加を決意したのは、先に述べた女性の知恵委員会で知ったジェンダーの問題について学びたい、また、国際的な視点からまちづくりを考えたいと思ったからです。大学の教授からインターン参加を勧められたとき、迷うことなく応募を決めました。

10月末にインターン生に選出された後、内閣府男女共同参画推進連携会議主催の「聞く会」や甲府市男女参画主催の「災害と男女共同参画」などの講演会に参加したり、ジェンダーについて書かれた文献を読んだりして、女性が抱える問題について理解を深めました。

そして2月24日、ついにニューヨークへの旅が始まりました。ニューヨークに到着し



た翌日は、引率して下さった平松さん、柳下さん、そしてインターン学生と共に国連本部へ行き、グランドパスを作成しました。例年手続きに時間がかかるようですが、今回はほんの 10 分ほどで完了しました。写真と名前が入ったパスを手にしたとき、インターンへ来たのだと実感し、感動しました。

2月26日はユニオンスクエア近くの国連サルベージン・アーミーでNGOのコンサルテーションデーがありました。グランドセントラル駅で偶然出会ったニュージーランドからの参加者と話しながら会場へ向かいました。彼女は学校で数学教師をしていて、引退してからNGOで活動しているそうです。会場には彼女のようなパワフルな女性が沢山いて、女性の地位向上のために活動している人々が世界にいることに感銘を受けました。

2月27日からは、CSWの開始です。私は開会式へ参加する機会をいただき、国連の総会議場で傍聴をしました。議題の決定や、各国代表のスピーチが行われている様子を直接目にすることができました。立派で、警備の厳重な総会議場で行われる式は圧巻です。ジェンダー問題が、私たちの社会にとって重要な課題であるとひしひしと感じました。そして3月9日まで、各国代表によるサイドイベントや世界中のNGOによるパラレルイベントに参加しました。日本代表のサイドイベントは、東日本大震災をテーマとしていました。会場には多くの人々が訪れており、世界中から強い関心が集まっていることがわかります。このイベントを通して災害時の支援の際女性への配慮が必要なことがわかりました。女性への物資の提供は女性スタッフが担当する、避難所に女性専用スペースをつくるなど、普段どおりの生活を送ってはいわれないことを学ぶことができました。また、BPWだからこその、女性の仕事を支援する活動について知ることもできました。助産師のマッサージの訓練用おっぱいを毛糸で作るプロジェクトの紹介には会場から強い関心が集められました。雇用と職業訓練の場を一度に創出するアイデアは、BPWらしい支援を示した、とても素晴らしいものだと思います。NGOが主催するパラレルイベントでは、女性の地位向上のために活動する人々と出会うことができました。イベントの発表者の多くはNGO職員、医師、大学教授など、社会の中で活躍している人々でした。彼女たちは、自国の問題を改善するために活動しています。医療、教育、法律などそれぞれの女性が行き詰る問題は多岐にわたります。そんな女性たちに共通するのは、問題意識を高く持ち、改善のために行動を起こしていることです。パラレルイベントの大部分は、自国の問題を訴えるだけのものではなく、現状をより良くするための活動を伝えていました。

私たちの周りには様々な問題があります。それはジェンダーであったり、地域間格差であったりします。でも、私たちは問題があることを嘆くのではなく、改善のために動かなければなりません。心強いことに、世界中には行動を起こしている多くの女性がいます。この世に生まれた人として、女性として、私も微力ながら改善のために活動していきます。私はこれから海外の大学院で学びます。卒業後はインターンで出会った世界中の女性たちのように、力強く生きていきたいと思います。

### 吉原 彩 跡見学園女子大学4年（参加時）

私はこの度2月25日から3月9日までNYに滞在し、BPWのインターン生として第56回国連女性の地位委員会と平行して行われるNGOや政府関係主催のサイドイベントや女性問題に関するワークショップに参加しました。

大学卒業を控え4月から社会に出ることが決まっていた私は、かねてからの目標であった、国連本部のインターンシップにまさか大学卒業間近で参加出来るとは思いませんでした。今回のインターンに参加したきっかけは、以前からBOPビジネスに興味があった事と日本よりも進んでいる世界のNGOの実情を肌で感じ、将来の自分の姿を模索したいと思い参加しました。NYでは本当に多くの出会いと発見がありました。これから印象に残ったイベントや今回のインターンを受け、感じた事、学んだこととお話ししたいと思います。

まず、25日のお昼に国連パスの名札の発行をしに国連に行きました。国連はホテルから10分くらいと比較的近かったです。2週間程国連に通いましたが、とても通しやすい環境でした。例年に比べ、国連パス発行はとてもスムーズに進み、時間があつたので、その日はMOMAのミュージアムに観光に行きました。

26日はNGO CSW CONSULTATION DAYということでこれから始まるイベントのオープニングイベントに参加しました。そこでは恒例となっているパチェレさんの講演もありました。それはとても興味深いものでした。

そして翌日からは早速国連内や国連の周辺の関連施設へ出向きディスカッションを聞ききました。実際イベント初日に国連本部に行ってみるとエントランスには大勢の女性達で活気に溢れており、いよいよイベントが始まったという実感が湧いて来ました。

今回のインターンに参加し私は、世界にはまだまだ貧しい女性がたくさんいるということ、日本の裏側には自分の人権を求めて女性達が活動していること、その活動を支援する多くのNGOが存在するという事を一番感じました。NGO組織にも様々な支援組織が存在し、内容も政府が関与しているものから、NGO単体で行われているもの、UNEPなどの国際機関が携わっているものなど様々でした。

また今回インターンに参加し考えを確立したのは、援助と支援の違いについてです。私は3.11の時に疑問に思っていたのですが、ただ金銭を援助する先に送るというものでは駄目だということ各国の平行イベントに参加し感じました。また、支援内容についてもそうです。私は今回参加して一番興味深かったのは、ロシアの支援団体です。

ロシアのrural womenのイベントに参加した際に印象に残った内容があります。それはただrural womenに支援するだけではなく、familyレベルまで支援しなければならないそれもただの支援というよりもrural womenが将来生活をマネジメント出来るようになるまで支援しなければならないというものでした。そのロシアの支援団体はロシアのrural womenの子供たちに支援している団体でした。その支援団体はeducation組織で文化教育からメディア教育、さらには子供達がこの先大学に通えるようにと、日本でいう塾のような教育もしているとのこと。さらには子供たちだけではなく、兄弟たちも教育しているようです。その内容もとてもユニークで日本では考えられないような、宗教教育から民族衣装のスカーフの巻き方やドレスアップの仕方までしているそうです。完璧な女性になれてないから将来結婚する為の教育をしているそうです。さらにはパソコンを使って将来ビジネスが出来るようにパソコン教育や日本でいう自動車免許を取得出来るような教育までしているそうです。

私はこのような組織こそが真の支援団体だと感じました。しかしまだまだこのレベルの支援団体が少ないのが現状だそうです。私が伺った限りでは他の国に支援内容をレクチャーするという活動がまだ出来ていないそうです。将来もっとこのような組織が増えてくれることを願っていますし、将来私自身がこのような組織にサポートできたらと思いました。

また今回は国連のイベントの他に日本以外のBPWのイベントにも参加させていただきました。BPWのイベントでは美味しいDinnerをいただきながら代表の方の挨拶を始め、ファッションショーと盛りだくさんでした。

8日のインターナショナルウーマンズディでは黄色いタスキをかけ国連の周りをデモ行進しました。日本ではなかなかない活動なので、とても面白かったです。またアフリカの民族音楽を皆で演奏し、歌にダンスにととても盛り上がっていました。私もダンスバトルに参加しました。

さらには3.11が近い事もあり、国連の展示スペースでは東日本大震災写真展が開かれ、震災関係のイベントのお手伝いもしました。写真展もイベントも多くの外国人の方々が参加して下さり本当に今回の災害に世界中の方々は注目して下さっているのだと実感しました。私もイベント期間中に自分が日本人だと話すと、「地震は大丈夫だったの？」とよく声をかけられました。日本にいただけでは感じる事の無い経験でした。また写真展では日本の報道では見られないようなリアルな災害時の写真を目の当たりにし涙を流さず

にはいられませんでした。

今回のインターンでは本当に多くの収穫がありました。実際 NY に行ってみるとまさに「人種のるつぼ」と言うべき環境で様々な国籍の方々が自分の生活権を求めて切磋琢磨しているようでした。

私自身4月から社会人になるにあたりインターン参加後会社の研修に参加しましたが、自分よりもレベルの高い学生が多くまだまだ将来このような活動をするには道のりは長いと感じました。しかし私自身日本でしっかり稼げるようになってから将来的には世界に出て支援出来るようになりたいと思いました。

最後になりましたが、今回この様な素晴らしいインターンシップをご紹介してくださった櫻井さんには本当に感謝しております。また10日間あまりのNY滞在ではありましたが、右も左も分からない私に多々ご協力くださった平松さんを始め、柳下さん、黒崎さん、また一緒にNYに行ったメンバー、CSWの関係者の方々には本当にお世話になりました。この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

この原稿を読んでいる頃には、私は社会人として世に出て仕事をしているかと思えます。今回NYで学んだ事を後輩に伝えていく事、若い日本の女性達に世界では自分の権利を日々求めて女性達が戦っているという事を私自身伝えていく事がこれからの私の指名だと思っております。また私達若い女性達がBPWに参加している先輩方を見習いこれからの日本を元気にすべく立ち上がり、世界の女性達と情報交換や男女平等の権利を求め活動し続ける事が大切だと感じました。

これからも今回の様な活動やBPWの活動には積極的に参加し、自分自身の視野を広げていきたいと思えます。本当にありがとうございました。

### 照井 奈々帆 津田塾大学2年 (参加時)

女性の抱える問題。それに初めて興味を持ったのは、ごく最近の去年の秋のことでした。それまで私は、どちらかというと女性運動といった類のものに対してあまり良いイメージを持っていませんでした。というのも、生まれて約20年間、一人の女性として育ってきた中で、私が「女性である」がゆえに不都合を被ったり、理不尽な思いをしたりすることが一度もなかったからです。過去のような男尊女卑社会であるならまだしも、女性の進出が目覚ましい今という時代に、なぜ女性運動が行われているのか。これは私の中で大きな疑問でした。その答えが分かったのは、去年の9月のこと。国際協力を専攻する私は、スリランカの茶畑で働く女性の姿を、JICA職員の方のプレゼンを通して知りました。酒浸りの夫のために、朝から晩まで両手を傷だらけにして茶を摘みつづけるその姿は、私の知る「女性」ではありませんでした。その時初めて、私が「女性である」がゆえに嫌な思いをしてこなかったのは、日本という恵まれた先進国だからこそであり、世界ではまだまだ男尊女卑社会が現存していることを知ったのです。ちょうどそのとき、今回のBPW-CSW派遣インターンのお知らせがPCに届いたのでした。

CSWに参加してまず感じたこと。それは女性たちのアクティブさへの驚きでした。日本人は控えめな民族だとはよく聞きますが、ここまで差があるのかと改めて衝撃を受けました。数々のParallel EventやSide Eventに参加してみましたが、どのイベントでも、パネルディスカッションが終わった瞬間にはもう何本も手が挙がっており、彼女たちは我先にと質問や意見を投げかけるのです。そしてもっと素敵なことに、その投げかける相手はパネラーではなく会場の全員なのです。イベントはパネラーたちのものではない。その会場にいるすべての人のものだ。…そんな姿勢を彼女たちから見る事ができ、私は大きく感銘を受けました。その姿に影響を受け、私も何度か発言しようとして手を伸ばしかけたが、どうしても英語への自信のなさから躊躇してしまい、結局一度も発言できずじまいでした。このことは今回の一番の後悔でもあり、これからは英語を多少間違えてでも、自分

がその時感じたことをなんとか伝えてみる努力をしようかと決心しています。

私は、今回のCSWで卒業論文テーマを決めようという気持ちでこのインターンに参加させていただきました。しかしながら、自分の英語力が足りていないこともあり、どのイベントに参加しても話についていくのに一生懸命になりすぎて、自分の頭でそれぞれのイベントについてもう一度考え直すということができなかったために、残念ながら論文のテーマ決定には至りませんでした。けれども大切なことは、卒業論文を執筆することではありません。自分の意志でニューヨークという場所に赴き、世界中の人たちが繰り広げる議論に耳を傾け、その場で「世界」を感じたこと。教育や家族計画、賃金などの点で困難な状況にいる女性が世界中にはまだまだたくさん存在し、そしてそんな彼女たちのために力を尽くしているNGOがこれだけ存在することを知ったこと。これは私の中で大きな成長の糧となってくれました。世界市民の一人としてその場で様々な会議に参加できたことは、これからの一生の中でもとても大きな思い出となるはずです。

これからの私は、日本人としてだけでなく、世界の一人という視点であらゆる女性問題や貧困問題に目を向けていくことができる。こんな素晴らしい機会を提供してくださったBPWの皆様へ、心から感謝しています。これからの私の課題は、今回のニューヨークへの派遣で培った世界の一人としての視点から、自分が本当に知りたいことや学びたいことを見つけ、それについて自分なりに考察、検証していくことです。そのために、今回のBPW-CSW派遣インターンでの経験を大切にずっと心に抱いていきたいと思えます。



BPWI Claire Fulcher Dinner

## II B P W参加者報告

### 1. UN-CSW56 優先テーマ「農山漁村の女性のエンパワーメント」

日本 BPW 連合会 広報委員長  
柳下真知子

第 56 回 CSW の優先テーマである「農山漁村の女性のエンパワメントおよび貧困と飢餓の撲滅、開発、現在の課題におけるその役割」を扱った国連での会議および NGO のパラレル・イベントを中心に報告する。

2月28日(火) 10:00~13:00 専門家パネル1「農村の女性のエンパワメント～農山漁村女性の経済的エンパワメントを中心に」

国連本部の会議場の傍聴席はいっぱい、隣接する会場の大モニターで「傍聴」した。優先課題「農村の女性のエンパワメント」の専門家「パネル1」は「農山漁村女性の経済的エンパワメント」を中心としたパネルディスカッションだった。パネリストは5人。それぞれ農業、開発、ジェンダーのスペシャリスト。モデレーターは Ana M. Hernabdo 氏 (フィリピン)。ちなみに翌9日の午後に開かれた専門家「パネル2」は「農山漁村女性のエンパワメントのためのジェンダーに対応したガバナンスと制度の役割」が主題。

パネル1のパネリストは、シリアの「乾燥地域国際農業リサーチ・センター(ICARDA)」の社会経済およびジェンダーの専門家、Malika A-Marini 氏。2011年9月にガーナのアカで開催された「農村女性の経済的エンパワメント会合」について発表した。次のパネリストは Shahaz W. Ali 氏。世界銀行で教育分野の仕事を経て現在パキスタンの首相の社会分野での特別補佐官。パキスタンの基本データを示して、パキスタンの農村女性について説明した。南アジアは一般的に男女格差が大きい地域であるが、パキスタン農村の識字率は男性 63%に対して女性は 35%とかなり悲惨な数字。農村人口が 63% (2000-01年) というから、女性の識字率は都市部を含めてもかなり低いであろう。一方で、パキスタンの農村女性は、雇用、土地所有、資金源へのアクセス、テクノロジーへのアクセスは法令上、宗教上、社会法上確保されているということであった。小規模融資を受けている女性の割合もかなり高い。農村で金を借りている者のうち 58%は女性。全体では、金を借りている 25%が農村の女性という。マイクロ

ファイナンスの銀行を増やし女性の起業活動を高めてゆくと述べていた。こうした現金収入は女性の家庭内での決定力をつけているというパキスタンでの研究ある。政府も農村女性に同様の援助を行っているということである。

しかし途上国ばかりでなく、実際面では、社会規範やジェンダー規範が女性の土地所有へのアクセスを妨げているのが現実であり、またこのことは CSW の優先テーマのセッションで繰り返し指摘されたことであつた。また農村女性のマイクロクレジットの利用は増加したものの、単に貸し付けへのアクセスがあることだけでは農村女性のエンパワメントには不十分だという指摘も何度か聞かれた。パネル1のモデレーターのまとめでは農村女性のエンパワメントのためには、彼らを取り巻く社会的障害を克服し、情報面でのコミュニケーション技術を駆使し、マーケティングを学び、事業面でのスキルや生産性を上げてゆくことが必要であり、そのためには教育が鍵となると指摘された。この結論もまた、その後続く NGO のセッション等で繰り返されたことである。国連本部でのハイレベル円卓会議では、農山漁村の女性の土地所有、土地相続が十分でないこと、それに加え公共インフラの未整備が水運びなど女性の労働を増やしていることも指摘された。

#### NGO のパラレル・イベント

NGO のパラレル・イベントやワークショップの数は 300 を超えたというが、優先テーマを扱ったものは、ハンドブック掲載のものだけみても、その約半数近くを占めていた。

2月29日(水) 10:30~12:30 「農村女性の懸念事項：ジェンダー、人種、社会階級との関わり」

主催：United Methodist Women  
このワークショップでは最初に、農村女性の或る抑圧的な状況が設定され、その筋書に沿って寸劇が行われた。西アフリカの或る国の 12 歳の女の子が、家族の空腹を助けるために、見たことも言葉も通じない男性のもとに、牛 1 頭と引き換えに「結婚」するというもの。



劇の後、聴衆に、どこをどのように変えたら  
ば違う結果になるかと質問し、手を挙げた有  
志によって一部違う配役でまた劇が始まる。  
更に手が上がり筋書が変わってゆく。その途  
中では、聴衆から抑圧された経験がいくつか  
語られたりする。実は結論がどうであったか  
記憶にないのだが、聴衆が様々な文化をもつ  
国から集まっていて参加者の反応も楽しく  
啓発的でそれなりに面白いセッションだっ  
た。



3月1日(木) 10:30~12:00 「農村女性の  
エンパワメントの問題について」

主催：National Association of Negro Business  
and Professional Women's Clubs, Inc.

主催団体は BPW と同名だが関係のない法人。  
久しぶりに、BRAC USA (貧困削減、識字教  
育、健康改善、人権問題にも取り組む団体で  
農村でのマイクロファイナンスの規模は世  
界的にも大きい) の話を聞いたが、バングラ  
デシュ農村では日本の NGO、JOCFP と似たか  
なり小規模なマイクロファイナンスもやっ  
ていることや、Aarong というプロジェクトで  
は2,300人余りの農村女性による工芸品から  
始めて、現在はダッカなどの都市で衣類から  
家庭用品、ファッション、おもちゃまでを扱  
うバングラデシュ最大のチェーンストア  
10店舗を展開しているという。同じセッション  
では、女子への教育が家庭を変え、また生  
まれた子どもの成長、成功に繋がるという  
transfer leadership、全体的に捉えたリーダー  
シップの重要性を強調する holistic leadership  
という概念を聞いた。

この外、日本の(社)農山漁村女性生活活動  
支援協会をはじめとするいくつかの団体が  
行ったイベントでは、農業女性と食料の安全  
保障、農業女性と起業、グリーンツーリズム、  
食の安全、都市との交流などを扱ったセッ  
ションも見られた。

## BPWI 主催・共催の平行・イベント

BPWI が主催あるいは共催する農村女性関連  
のセッションにも参加した。ふだん BPWI の  
会合では主に、国連グローバル・コンパクト  
と協働する女性のエンパワメント原則 (WE  
P s) やインターナショナル・トレード・セ  
ンター (I T C) と組んだ女性のビジネスの  
ネットワーキング、躍進、イコールペイ・デ  
イキャンペーン (男女賃金格差是正) など  
であるが、農業分野ではどのような活動をして  
いるのか、BPWI が関係した平行・イベン  
トを紹介する。

2月28日(火) 14:30~16:30 「より良き  
農山漁村女性の暮らしのために：その課題と  
チャンス」

BPWI 主催のワークショップだけあって、B P  
WI の会長、前会長、副会長をはじめとする  
役員が勢揃いしているセッションだった。女  
性役員を多く抱え、女性も経営のリーダーシ  
ップを取っているという米企業の、インドで  
の農村女性のマイクロ・クレジットによる好  
事例が紹介された。(黒崎氏報告参照にこと)

3月2日(金) 8:30~10:00 「創造的な農  
村女性のエンパワメント：事業開発とグロー  
バルな進出のチャンス」

このセッションでは、BPWI が TCF (Textile,  
Clothing, and Footwear) Global という、農村女  
性に小規模ビジネスを展開する場やそのた  
めのビジネス・スキル、世界のデザイナーの  
ネットワークにアクセスする機会を提供す  
る団体(非営利)と協働したプロジェクトを  
紹介していた。BPW オーストラリアは TCF オ  
ーストラリアと共に、新進のデザイナー及び  
ファッション業界に支援と資金の援助を行  
っている。パキスタン、南アフリカのプロ  
ジェクトの紹介もあって、地域の女性が作  
った色とりどりの織物をステージに並べて  
いた。また「B P Wビジネス・インキュベ  
イター」という、オンライン・トレーニング・メン  
タープロジェクトの立ち上げの説明もあ  
った。これは起業を志す女性に必要な項目別



セミナーをネット上に用意し、ビジネス・ウーマンとして育てる（ふ化させる）というプログラム。セッションは朝8時半であったが、会長以下副会長ほか顔を知る役員が大勢やって来ていて、新しいプログラムへのBPWIの意気込みが感じられた。

**BPW International 関連イベント及びその他の主な参加イベント**

日時	イベント/ワークショップ
2 /27 17:00-	BPW コーカス
2/28	会期中毎朝ブリーフィング
	8:45-
2/28 14:30-	「より良き農山漁村女性の暮らしのために：その課題と機会と」
2/29 13:00-	「イコール・ペイ・デイ（EPD）ワークショップ」
3/01 18:30-	BPW クレア・ファルチャー・ディナー
3/02 08:30	「創造的な農村女性のエンパワメント：事業開発とグローバルな進出のチャンス」
3/02 18:15-	「アジアとモンゴリアの農村女性の共通課題と各政府の行動」
3/05 17:00	BPW コーカス
3/08 12:30-	「農村の女性と子供たち：トラフィッキングのハイ・リスク・グループとして」
3/11 9:00-	BPW メトロポリ短美術館ツアー
	BPW以外の主な参加イベント
2/26 09:00-	NGO CSW コンサルテーション・デイ*
2/28 18:00-	NGO NY/CSW レセプション
3/01 13:00-	日本3NGO主催によるサイド・イベント
3/02 12:00-	UN Women 主催のランチョン
3/02 18:00-	日本政府国連代表部によるブリーフィング
3/01 昼	インターナショナル・ウィメンズデイのマーチ
3/09 18:00-	日本政府国連代表部によるブリーフィング

**さいごに**

全体を通して、現在世界の女性が抱える課題が農山漁村女性、先住民女性の状況に集約されていると言っても過言でないと思えた。交通インフラも十分でなく孤立し様々なサービス・支援が受けられないという地理的要素もさることながら、貧困、不十分な教育、DV、妊産婦死亡をはじめとする健康問題、HIV 及び AIDS、差別的慣習、また人身トラフィッキング、少数民族の社会的差別、紛争下に置かれた女性たちの苦境など、重大な人権侵害のすべてが語られていた。国際機関、NGO、援助国による支援は多数あるが、問題の解決は簡単ではない。ただその中でも女性のエンパワメントは少しずつ進んでいると思えた。

NGOの平行イベントでは、同時に農山漁村女性の起業、それを支援するNGOの多様な活動、成功例の話しも聞かれた。こうした経済活動への参加が彼らの自信につながり躍進へと導くことは見逃せない。農山漁村女性がおかれた状況への悲観的な見方だけでは前に進めない。

今回のCSW参加は私にとっては、2度目だったが、熱心な、そしてそれぞれに自立した4人の若いインターン生に恵まれ、当初少しか不安だった引率の重責も実に楽しく快適なNY滞在となった。また同室した平松さん、黒崎さんのバイタリティーには圧倒されるばかりだったが、こちらでも楽しく学ぶべき事の多い時間であった。帰国して、すぐにスマホに切り替えた。どうも若い人に刺激を受けたらしい。



## 2. 大きく変化している国際社会のジェンダー問題

### －第 56 回国連女性の地位委員会報告－

元連合会会長 黒崎伸子

NGO 代表の一人として政府代表団で参加した CSW54 (2010) 以来の参加で、かつて連合会役員としての参加から、まだ 6 回目。私にとっての CSW は、①世界中が女性に関する同じテーマで集中議論する 2 週間 ② BPW-International の一員としての活動・その仲間との出会い ③国際的な視点で日本の状況を見直すこと、④眠らない Big City-New York の生活の楽しみ という意義を見出してきた。

今回は、日本の NGO が主催したサイド・イベント『災害・復興とジェンダー平等』での発言が主な目的なので、NY 滞在は 4 日間だけだった。BPW としての任務はほとんど果たしていないが、久しぶりに平松国際委員長や柳下広報委員長ともいろいろお話できる時間が持てたことにも感謝して、BPW 会員の一人として、私見も含めて報告する。BPW 主催イベントについては、役員のお二人から正式に報告があると思うので、詳細は省いている。

**【1】主要課題 rural women について**私が国連第 3 委員会政府代表団の一員だった 2007 頃から、途上国における rural women の課題解決の動きが加速した。農山漁村の主要な労働者でありながら、貧困から抜け出せず、人権もなく、そのような地域では女兒の教育も軽視されるという状況を問題とした。今回の私が参加した rural women を主題としたワークショップは次のようなものである。

2 月 29 日 (水) 10:30-12:00 “Rural Women and Political Leadership”



主催は、WONGOSOL (Women NGOs

Secretariat of Liberia) という Liberia の平和と安定のために複数の女性 NGO が集まった組織である。これに所属する団体のさまざまな活動が紹介された。2005 年に就任したエレン・サリーフ大統領が、財務省・通産省・法務省の官僚や警察庁長官の重職に女性を起用したこともあって、民間女性性自身の意識も高い。選挙ではいい加減な男性に対し、女性候補者たちは community の needs に即した政策を掲げているという。にもかかわらず、国会議員で女性は 10%前後。まだ、底辺を支える女性たちの識字率が低く、この向上のために活動する団体や、農村女性たちの社会的かつ経済的自立支援の動きを促進したり、あるいは、女性に関する法律を学ぶための研修や、貧困撲滅にはどのような事業や対外的アピールをしたらいいかの研修も行われている。一方で、この WONGOSOL に所属する各団体間や国際組織とのネットワーキングにも積極的である。

3 月 1 日 (木) 10:30-12:00 “Violence Against Rural Women and Girls: Experiences and Solutions - Participatory Video in Action”

国際ソロプチミストの主催。国際YWCA代表の Marcia が最初の発言者であるが、自身も暴力の犠牲者であったということに始まり、次の発言者に質問を投げる形で議論をつなげていくという面白い進行であった。rural area に暮らす女性や少女たちが暴力の被害者になりやすい要因は何か、都市やその近郊の女性たちとどんな違いがあるのか？そして、rural area の女性はどういった努力が必要なのか？と問いは続く。それに答えるのは、同じく被害者のエルサルバドルの Monica である。彼女は、学校教師の多くが男性であり、教育方針が男性によって決められる事を要因として指摘した。また、オーストラリアの Robyn はタイの女性・少女の売春や HIV/AIDS 感染の問題を指摘した。貧困という背景の他に、学校に行くための遠い通学路でこのような組織に取り込まれてしまう危険があると



いう。ある事例として、アルコールやdrugの規制を強化することで地域での女性たちへの暴力が減ったことも報告された。質問やコメントを述べる女性たちの多くは、genocideから生き延びたというルワンダ女性や夫からHIV/AIDS感染し、3人の子どもをエイズで亡くしというパプアニューギニア女性など、真摯な発言が会場のchapelに座る参加者の心に響いたセッションであった。

3月2日(金) 10:30-12:00 “Strategic Gender Framework 2012-2015 by Enhancing MDG1, 3 & 8 with Specific Focus on Rural Women”

African women Independent Forum 主催。今回のCSWでは、主要テーマの影響もあって、とにかく活躍が目立っているアフリカ女性たちによるパネルディスカッションの一つであるが、参加者はアフリカ以外の女性も多く、国際社会が目指しているMDGのgoalである2015年まで残り3年という今、直近の課題と今後の施策展開についての議論は大変興味深かった。その中のいくつかのコメントを上げると…、○MDGは政府のためでなく、国民のためのゴールであるから、施策の展開より現場・communityで重要な役割を果たしている女性が鍵を握る。○女性たちの力を「One voice 一つの声」にしないと改善が難しい。○MDG1は社会の広範な問題解決が必要に見えるが、まずは子どもを貧困から救うなど、現場の最重要課題から解決することから始まる。○MDG3はジェンダーの視点が解決のカギである。○様々な会議を得て方針を決めても、その実行の遅れが目立つので、もっと実施を促進しないとイケない。○政府・自治体とNGOの協働がもっと求められる。とくに、地域での施策実行にはNGOが重要。(例：DV対策など)

**【2】BPW-Internationalの活動** ヘルシンキ・ kongressで選出された役員体制で最初のCSWだが、毎朝7:45からのBPWとしてのbriefingで、本会議傍聴者は会議の進捗状況を、代表団D-20は注目されたパラレルイベントでの発言などを、逐次報告した。D-20が欧米・アフリカで占められ、アジアの顔が見えなかったのが残念であった。(BPWの地域訳がAsia-Pacificなの

で、この代表はオーストラリア・NZで占められたのだろう。)

BPWが主催した4つのパラレルイベントのうち、二つに参加した。

2月28日(水) “A better life for Rural Women; Challenges and Opportunities” : 4つのチャレンジが報告された。米のグローバル企業 Manpower Group社は全社員の70%が女性で、企業運営への積極的参画・女性のリーダーシップ・環境問題を重視している。2004年末のスマトラ沖津波で農漁業体制が崩壊したインドの沿岸地で、地域女性たちのための研修、縫製や工芸品などのmicro-creditなどを通じて、女性の財産所有を促し、rural womenが集まって、家族や地域のこと議論できるようにしていた。アフリカの2女性の事例のあと、モンゴルの不動産会社CEOの個人的経験が語られた。BPWモンゴルの女性の女性は、彼女自身の個人的経験だけに偏っていた感があり、ちょっとガッカリしたというのが、私の印象である。モンゴル女性がどのような問題を抱えていて、それをどう解決しようとしているのかは見えてこなかった。日本人にとって、すでにモンゴルは一隣国であるので、物足りなく思ってしまったのだろうか。首都ウランバートルは近代化しているが、貧困層が30%もいる現実の中で、女性が高等教育の機会を得るだけで底辺層の底上げはできないと私は思っている。

2月29日(木) “Equal Pay Day (EPD)” : ドイツの国連代表部でこのイベントを開催するようになって、もう4年が過ぎたのだろうか。司会者は、世界の働く女性のうち20%は夫より収入が多いといったが、日本ではどれくらいなのだろうか？



最初は、ドイツの家庭・高齢者・女性・青少年省の大臣 Eva Welshop Deffaが挨拶した。メルケル首相が任命した、彼女の前任でライエン大臣は、子育ては専ら家庭で母親が担う

べき役割であるという固定観念を払拭すべく著明な働きをしたと聞いていただけに、このEPDのキャンペーンが政府の方針に合致したのだと思う。

EU委員会のGender Equality担当のMaria Tomassettiは欧州内の状況を報告した。まずは、男女の時給差があることから始まっており、背景には、女性への直接差別・伝統的でステレオタイプな視点・労働市場における女性への差別 (segregation) ・ガラスの天井などがあると指摘した。そのために、女性たちは少ない年金 (手当) で貧困のリスクも高いなどの問題がある。これに対し、EU全体でもこれらの改善への対策を図っているという。

BPW-InternationalのEPDタスクフォース委員会委員長で、EPD提案者・BPWドイツ前会長Dr. Bettinaが、現在に至るまで、各地でどのようなEPDキャンペーンがなされたかを報告。さらに、BPW-Internationalの欧州リージョナルコーディネーターSabina (スイス) は、欧州各国での取り組みとその成果を紹介した。

2年ぶりにBPWのEPDの話聞いて、BPWの各国はどんどん連動しており、なぜ日本は？と思った。さらに、2010年統計では、日本は国際統計の下から2番目で、最下位の韓国BPWは2011年にEPDを制定してキャンペーンをやっている。そして、欧州リージョナル・コーディネーターの報告の中で、計算式があり、日本で想定していたEPDとは概念が全く違う事に気付いた。つまり、男性が1年間年末まで働いた場合に、同じ賃金を得るために、女性はさらに何日働かなくては行けないのか…という発想で計算。かける母数が、年間の就労日数 (週休2日と祝祭日を365日から引いた日数: ちなみに日本は245日) で、2010年の男女賃金格差が69.8%というデータから計算すると、今年の日本のEPDは4月17日となった。そして、統計のある中で、日本は韓国に次いで2位のgender Pay Gapがあるという不名誉な結果であった。さて、昨年3.11もあって、さまざまな活動が休止した状態であっただろうが、だからこそ、この問題に取り組むべきではないかと意を強くした。

### 【3】国際社会という視点からみた日本の状況：

3月1日 (木) 13:15~14:30 日本のサイドイベント この数年、毎年のように、日本が主催してきたサイドイベント。今年も、国際婦人年連絡会、国連NGO国内婦人委員会・日本女性監視機構 (JAWW) が日本政府国連代表部の後援で『災害・復興とジェンダー平等』と題して行われた。これについては、別に正式報告があると思われる。7名の発言者のうち、平松さんが日本BPW連合会が被災地支援のための募金活動を行い、それを、被災地で女性が運営する事業への支援としたことなどの報告は、みなに注目された。私は、国境なき医師団が行った災害初期の医療援助活動の実際を報告して、まだまだ、日本ではNGOとの協働での災害支援活動ができる体制がないこと、NGO自身の脆弱性から信頼がないと指摘した。阪神淡路大震災 (1995) ではボランティア元年といわれ、今回もボランティアは活躍したが、資金・運営基盤の安定したNGOの姿は少なく、時間のかかる復興への長期支援には個が主体であるボランティアではなくNGOの取り込みが必要であると訴えた。会場の定員を超える人が参加し、今回の震災についての諸外国の関心の大きさを感じた。



### 3月2日 (金) “Moving Toward a Just Peace: UNSCR 1325, Inclusive Peace-building, Relevant Research” by International Sociologist Association

2010年CSW代表団のNGOメンバーで、日本政府にCSR1325に関わる国内計画の制定について要請をしたのだが、日本政府関係者はこの動きをほとんど無視していた。そして、今回のCSWでは、安保理決議 (CSR) #1325について議論するセッションがいくつかみられたので、これに参加した。これは、そのうちで、よくまとまっていた。

A. K. チョウドリ前国連事務次長（元・国連安全保障理事会理事）が、UNSCR#1325 の意義が説明された。彼は、これまでに何度も、このSCR1325 決議のさらなる活用を訴えてきた。つまり、女性が戦争の予防や平和構築、さらに個人と社会の調和ある生活の推進に貢献できることをアピールし、この精神と実践項目の効果的実現のためには、各国はそれに関わる国内計画を定めて実行し、その他の機関も、それらの実現と監視などの機能を強化する必要がある。その後、アメリカや南アフリカ等の大学のこの問題に関する専門家の研究結果、さらに最近 UNSCR1325 に関する国内計画を制定したエストニアの例が報告された。エストニアでは、外務省が中心となって市民団体の意見を参考に国内計画を制定したばかりで、これに予算はついていないなど問題は多く、これからその実効性について監視するということである。

他にも、既に国内計画が制定されている国も多いが、その成果についての評価はまだまだのようである。ただ、1325 決議は、紛争に関わるものと思われがちであるが、平和維持活動という名目で、女性への暴力・虐待を黙認してきたことについては、批判者を処罰するという国際社会の責任もあり、市民社会の中心を担っている女性を取り込んで、生活の安全確保、平和の構築・維持を図るという点では、国内計画の制定は、その国の教育や各種施策にも変化をもたらすものとなる。日本では、従軍慰安婦問題などに敏感で、この課題へ後ろ向きであるが、もっと将来へ向け、国際社会への貢献のために、勇気をもって進んでいけないものかという意を強くした。

3月2日（金）18:30~20:00 国連代表部ブリーフィング：、恒例のCSW への NGO 参加者に対してのブリーフィングが行われた。国連代表部でCSW を担当する社会部の木村公使や照内 2 等書記官の他、日本から派遣された岡島男女共同参画局長や農林水産省などの関係者 6 名、橋本ヒロ子代表と NGO 代表 2 名に対し、各 NGO からの出席者は 40 数名と最近では最多ではなかっただろうか。そのうち、BPW 関係者は、会員 4 名（平松・柳下・篠崎・黒崎）とインターン 4 名で 5 分の 1 を占めていた。今回の CSW の特徴と、成果文書 (agreed conclusion) 案の概要、提出される予定の決議案、さらには今回で 1 年目を過ぎた新しい国連機関 UN-Women の現状について報告があった。

《CSW56 に出された決議案》 今回、日本政府は「自然災害とその復興におけるジェンダー平等」に関する決議案を提出した。その内容の要点は、以下の 7 点である。① “絆” という言葉に象徴される community を基盤とする inclusive society 構築の重要性 ② 女性の人権重視・ジェンダーの視点による暴力の予防 ③ 食糧・栄養・水・衛生などにジェンダーの視点での対応 ④ community を基盤とした女性の地位の確保および経済的安定 ⑤ good practice/lesson learning という意味での東日本大震災での経験の共有 ⑥ civil society の取り込み、ボランティアにおける女性の強化 ⑦ UN women を含む国連機関における災害対応にジェンダーの視点を

その他の予定決議案は、○妊産婦死亡率の改善と女性のエンパワーメント（米国提案）○女性・女兒と HIV/AIDS (SADOC) ○先住民女性（ボリビア・エルサルバドル・エクアドル）○女性と児童の人質（アゼルバイジャン）○パレスチナ女性の状況と支援（G77+中国）○FGM 撲滅（アフリカ諸国）の 6 題であり、いずれもコンセンサス承認を目指しているが、パレスチナ女性に関しては、特定国間の政治に関わるということで投票に附されるはずである。

《成果文書》 rural women のエンパワーメントとその貧困や飢餓の撲滅や開発への役割を謳ったものであるが、現在、各国が意見を出して調整中ということであるが、重点は①ジェンダーを加味した政策の実施 ② rural women の経済的支援による貧困からの脱却 ③ rural women の資源や財産へのアクセス ④意思決定の場における rural women のリーダーシップ育成 の 4 点である。おそらく、この方針に異論はないので、会期内に合意に達するだろうとの説明であった。《UN Women》 2010 年 7 月の国連総会決議によって、それまで個別にジェンダー平等に取り組んできた 4 つの女性関連専門機関；DAW（国連女性地位向上部）、INSTRAW（国連婦人調査訓練研究所）、OSAGI（国連ジェンダー問題特別顧問事務所）、UNIFEM（国連女性開発基金）が統合されて設立された。そして、その新機関のカリスマ的トップとして選ばれたのが元チリ大統領のミッチェル・バチエレ事務局長である。この新機関は、1) 女性の政策・施策決定への参画推進 2) 経済的エンパワーメント 3) 女性・女兒への暴力の撲滅

4) 紛争下の女性の問題解決 (SCR1325)  
5) universal mandate としての gender budget という5つの優先事項を掲げており、具体的な運営では、現場主義（現場にある事務所の決定を重視）と成果主義（目標を設定し、その実績を評価）をとっている。これらのために、バチエレ事務局長は世界中を飛び回って、その重要性を説いている。さらに、国連機関ではあるが、UN Women の運営資金のうち、国連からは5%しか出ておらず、そのためには資金調達が必要で、NGO や学識者・各国議会との協働を強化しなくてはならない。

以上のような、代表部からの詳細な説明の後、参加者との質疑応答の時間が設けられた。

**【4】大都市NYとは…：** 大都会は、世界のどこも同じという人もいるが、やはり、NYはちょっと違う。今回は、美術館にも、公園にも、ミュージカルにも行けなかった。ただ、国連周辺の街路ですれ違う人たちの気配に、ホテル近くの店の中国系店員に、朝の路上で売るベーグルや昼のケバブの香り、スタバのカップを持って職場に向かう人たちに、夜中のゴミ集めやパトカーの騒音などに、NYを感じる。そして、このCSWの2週間は、国連周辺が世界各地からの4,000人余りの女性たちでいろんな色に染まり、活気であふれる。NYに長く住む人たちも、この期間は異様だと言

う。私は、そんな、CSWのNYは大好きである。

短期間の滞在で、1日だけ、プライベートを楽しんだ。六本木ミッドタウンにUnion Square Tokyoというお店があり、いつも、そのwaiting barだけでお酒を飲んでた。先日、NY行きの話をしたら、ぜひ、NYの本店に…と言われたので、Princetonに住む従姉夫婦とその娘夫婦に子ども二人と待ち合わせをした。Union Square CaféというZAGATにもあるお店である。6時に待ち合わせに少し早く着いたので、ちょっと近くのキッチン雑貨のお店でいい土産ものがないかと買いものをしていたら、突然、店員が「警察があと10分は外に誰も外に出ないようにと言ってきた」という。前の通りは、警察官・パトカー・バイク（機動隊？）がいっぱい。Obama大統領がこの近くに住む大口支援者に会いに来ているための警備とか…。と黒塗りの大きな車が5台ほど、通った。表のドアや窓に、店員や他の客とともにピッタリ顔をつけて目をこらしていたが、残念ながら大統領は見えなかった。…10分が、20分経過して、ドアがやっと開放。でも、そのメインの通りは歩行禁止というので、裏のブロックを通過して待ち合わせのレストランへ…。とんだ待ち合わせだった。それでも、Union Square Caféで食べたビーフ・サーロインのカルパッチョは最高の味だった。

### III. 情報集 Q&A

#### インターン

##### Q. スケジュールの組み方は？

A. 国連通行証発行、NGO Consultation Day、BPW の行事、日本政府の行事は BPWJ の方々にご指導いただきながら一緒に行動をしました。ワークショップやイベントの参加等各自で予定を組んで行動しました。ワークショップはたくさんあるので HP や冊子で情報を得ることが重要です。

##### Q. 登録が必要な NGO 行事は全て参加すべき？

A. 参加費が必要な行事がありますが、興味深いイベントですので参加をおすすめします。支払いはインターネットからクレジットカードで行います。

##### Q. 服装は？

A. 参加者は様々な服装をしていました。ジャケットを着ていたり、カジュアルであったりします。アフリカ女性は民族衣装を着ていることが多かったです。何度か着物を着たところ、多くの方に関心を持っていただくことができました。ニューヨークの冬は寒いと聞いていましたが、今年の冬は暖かかったようで、カイロや帽子は使用しませんでした。手袋はあった方が良くと思います。



民族衣装と来ている女性と

##### Q. 持ち物は？

A. 名刺を持っていくと便利です。

#### ホテル

##### Q. 宿泊先は？

A. インターン生でホテルの一室をシェアしました。宿泊費用は一人一泊一万円ほどでした。

THE NEWYORK HELMSLEY HOTEL  
212 East 42<sup>nd</sup> Street



**Q. 予約は？**

A. インターン生一人が代表をしてインターネットで行いました。支払いは、クレジットカードで一括払いです。

**Q. 洗濯は？**

A. 持参した洗濯用洗剤で各自部屋のバスルームで手洗いしました。エアコンの近くに干して乾かしました。ホテルのクリーニングサービスは割高です。

**その他**

**Q. お金は？**

A. 宿泊費用の他に食事代、お小遣い、お土産代を持っていきました。おおよそ 500 ドルほどです。クレジットカードが使えるお店が多く、よく使用しました。

**Q. 食事は？**

A. ホテルの周辺にはパン屋、デリ、カフェ等があります。ドラッグストアで飲料、お菓子、シリアルを購入することもできます。国連内にはカフェテリアがあります。

**Q. 観光スポットは？**

A. 国連の通行証を見せると、MoMA 等の美術館入場料が無料になります。ミュージカルはタイムズスクエアのチケットブース (TKTS) で当日券を半額で購入することができます。国連ツアーに参加するのもおすすめです。費用は 11 ドルで、会議室や総合ホールを見学しながら国連や関連組織について説明を受けることができます。

**Q. お土産は？**

A. 国連内に雑貨や本を売るお土産屋さんがあります。ポストカード、キーホルダー、チョコレートなどのお土産を買うことができます。国連通行証を見せると 20~25%off になります。また、パラレルイベント会場 (今回は Church Center) で Artisan Fair が開催されます。これは CSW に参加している NGO が物品販売を行うイベントです。女性支援をしている団体や、フェアトレードを行う団体の人々から直接コーヒー、アクセサリ、キーホルダー、服などを購入することができます。



国連内のお土産屋さん

## おわりに

報告書を読んでもくださり、ありがとうございます。この報告書には、インターンの機会をいただいた感謝の気持ちと、後輩へのエールの気持ちを込めました。私たちインターン生4名は、この度のCSWを通して、多くのかげがえのない人々と出会いました。そして、報告書には載せることができないくらい、たくさんの貴重な経験をしました。国連には、世界中の熱い情熱を持つ女性、精力的に活動する女性が集まっていました。それぞれの国の女性が抱える問題は、国の発展の状況によって異なります。でも、問題の根底にある、女性も男性も平等に医療、教育を受け、仕事を持ち、はつらつと生きたいという思いは共通であると感じました。多くの女性と関わり、女性の持つ問題について理解を深めることは、これから社会人となる私たちには大変重要なことです。普段学生として生活していると男女の格差について感じることは多くありません。しかし実際に格差や差別は存在しており、この問題を改善していくことが社会の一員として生きる私たちに求められていると思います。

また、重要なことは、インターンへの参加そのものではなく、参加した後の行動だと考えています。私たちがすべきことは、このインターンでの体験を多くの人々と共有すること、女性が抱える問題について学び続けること、女性として社会で堂々と生きていくことだと思います。幸いにも、日本、そして世界にはたくさんの頼もしい女性がいます。様々な分野で活躍する諸先輩方に追いつけるように、後に続く私たちも女性の地位向上に貢献できるように、行動を起こし続けていきます。

インターンを通して得たものとして、忘れてはならないのが、仲間との出会いです。インターン期間中は、参加学生それぞれが参加したプログラムについて情報を共有し、各自の考えをぶつけ合いました。学生であり、女性であるという近い立場にしながら、それぞれが違う意見を持っていて、自分とは異なる物の見方に刺激を受けましたし、勉強になりました。そして互いに切磋琢磨しながら、さらなる成長を目指したいと考えました。これからも、この同年代の関係を大切にし、つながりを大きく広げていきたいと思っています。

最後になりましたが、このような大変すばらしい機会を与えてくださった日本BPW連合会の皆様、出発前にアドバイスをしてくださった宇佐美様、右も左もわからない私たちを現地で導いてくださった平松様、柳下様、黒崎様には大変感謝をしております。皆様は、まだまだ未熟な私たちの話をじっくりと聞いてくださり、思いやりのある意見をくださいました。職業や専門知識を持って、社会でご活躍されている皆様は私たちの憧れです。これから先、私たちは迷ったり、悩んだりすることがあるだろうと思います。そんな時、皆様からご助言をいただければ幸いです。繰り返しになりますが、この度は、得がたい、貴重な学びの機会を与えてくださり、ありがとうございました。これからも女性の一員として、学び続け、行動し続け、諸先輩方のような立派な女性となれるよう、精進していきたいと思っています。



特定非営利活動法人日本 **BPW** 連合会

---

〒151-0052 東京都渋谷区代々木 2-21-11 婦選会館ビル 303  
TEL 03-5304-7874 FAX 03-5304-7876  
E-mail [office@bpw-japan.jp](mailto:office@bpw-japan.jp)  
URL <http://www.bpw-japan.jp/>